

389
53

禁
複
写



始



2157-42

389-53



美文評解叢書

蘆花
鷗外

傑
作
文
集

大正
10 10.27
内交

序

如何にすれば、文章に上達するかは、余の幾度となく人に問はるゝ所なるが、それには、古人既に看多、做多、商量多の三者を挙げたり。即ち多く読み、多く作り、多く考ふる也。これにて作文の要は盡きたるが、看多には、なほ一考を要す。唯多く読むだけでは不可也。名文を読んで、暗誦せざるべからず。余在來能文の士の少年時代の事を問ひしに、いづれも名文を暗誦せざるは無し。人によりて記憶の強弱あり。その強きものはわざわざ暗誦せずとも、一讀すれば、直に記憶す。その弱きものは幾度も讀み返さざるべからず。いづれにしても名

文の記憶の有無は、能文と否との岐るゝ所なりと云ひて可なりと信ず。今、この書を見るに、能く明治大正の名文を擇び、且つ精しく説明を加へたり。これ山に登るものに取れてケイブルカーを得たるが如き也。されど此書を唯ざつと見るだけにては、さばかりの効なし。暗誦するまでに、熟讀せざるべからず。さらば自から作らずに居られざるべく、知らず文章に上達すべき也。

大正十年夏

大町桂月

序

文を書く人にはそれ／＼の長所あり。そのすぐれたるところを取りて、編者評解を加ふ。

たゞ傑作としてならべられたるものを讀まんよりは、これ／＼の個所、これ／＼の書きぶりのまされりと、評解を加へられたるものを讀まば、讀む人、いかばかりか面白からん。

殊にすぐれたる人の書きたるものは、皆な一様にすぐれたるが如く思ひなして讀み過すが人情なり。此の書はすぐれたる作者のそれ々の傑れたるところを採りて簡にして妙なる評語を加ふ。一段と讀む人のたよりとならん。

前田曙山

序

本書は我が現文壇作家の傑作を集めたものであります。世にある此の種の書の多くは皆それ々の特長があつて廣く讀まれて居りますが、併し私の此の書は、世の同種の書とは大に趣きも變つて居ると信じます。その一は評解を加へたことであります。その二は只單に傑作を集めるばかりでなしに、作者その人々の個性のよくあらはれ

て居るものを探る事にとめたこととあります。よく讀者諸君が味はつて読んで下さつたら、私の意の存するところもお分りにならうと思ひます。

大正十年初秋

菊池 曉汀

美文評解叢書目次

蘆花傑作文集

葉山の夕日	一	人生	三三
平家の家	六	噴泉	三五
海の日の出	一〇	僕の家	三七
偉丈夫の山	一三	初對面	四〇
夏の樂み	一五	霧	四二
凄冷の氣	二〇	湯	四五
寂寥	二三	漂泊の少女	四八
十五夜	二五	愁人	五〇
雨後	二八	圍爐裏	五三
流水の行末	三〇	汽車の窓	五五
		熱血	五九

次 目

眞夜中	三三
艶馬	三五
名花	八一
雨と雲	八二
曠野	八四
聲	八七
納涼	八九
犬	九二
春の愁	九四
花	九五
日光の奥	九六
武藏野	一〇〇
夜	一〇三
湯槽	一〇六

千代と鳴いた	一一二
男の中の男	一一七
實相	一二九
暗い秋	一三四
急場	一三七
五城	一三〇
眞情	一三三
晚景	一三五
湯宿	一三七
魔の淵	一三九
藏棚茶屋	一四〇
流し雛	一四四
看護婦	一五一
一個の石	一四八

鷗外傑作文集

散文詩	一九七
石	一九九
訪問	二〇一
感想	二〇五
運命	二〇七
衰考の戯曲	二一一
無上の強者	二二四
戯曲	二二六
舊劇	二二七
藝術	二三二
個人主義	二三九
句讀	二五七

彫刻	二三八
洋畫	二四八
過去の生活	二五一
掠島	二五三
箆筒	二五五
手の遣所	二五九
明智の運明	二六二
幸福	二七〇
誤解	二七四
戀し懐しき君	二七七
青年二人	二八八
初戀	二九六
叔父	三〇四

目次	
○ 柵	三三
○ 暗黙	三三
○ 東北へ	三三
○ 妹に	三三
○ 森の家より	三三
○ 焚火	三五
○ 犠牲	三五
○ 半ヶ年	三五
○ お政	三五

美文評解書叢目次終

集文作傑花蘆

美文評解書叢花傑作文集

葉山の夕日

菊池 曉汀 編

伊豆の山に日は傾きぬ、葉山の波淘去し又淘來せり。
 予は長者夕輪に散歩して歸りつゝありき。
 予は俯きて歩めり。忽ち籟々沙鳴りて、大小二つの影法師眼前に落ち來れり。
 予は目を揚げて二箇の人を見ぬ。

長は四十ばかりの保母らしき女、一人は七つか、八つには過まじと見ゆる美しき女の兒なり。振分髪はふさくと白き顔に浪うち、紫矢紺の被布着て、緋天の緒の雪駄穿きたり。

老女は無言。少女も無言。少女の美しき面には、子供にあるまじき悲寥の色あるを認めぬ。何人の兒なるか。

濱に下り來し漁師の妻に問へば、聲を潜めて答へぬ。「あれはハア秋田様の芳ちやまですよ。」秋田！ あゝ是れ裏に家内の波瀾より自殺して果てし秋田子爵夫人の忘形見の一女か。

予は振り返り見ぬ。二人は今正に大なる岩の蔭に入りて、紫の被布の袂のみちらくと仄の見えたり。

予は頭を垂れて歩みぬ。砂には小さき雪駄の跡續きたり。

予は頭を垂れて歩みぬ。夕日の光は海にも山にも満ちて、今日も寂かに暮れんとす。濱には人の影もなし。波は一つづゝ足下に來りて碎け、來りては碎く。

三段ばかり沖の方を過ぎ行く舟あり。疑乃の聲、物悲しく夕日の空に響けり。

予が眼中曇り、雙涙はらくくと砂上に落ちぬ。

可憐兒！ 卿が母は美人なりければ、懸望せられて秋田子爵夫人となりぬ。

誰か思はん、其の搖輿は荊蘇を編みしものならんとは。

夫は大各華族、弄花に巧みに、射的に妙なり。彼が三度妻を更て、妾を換ふ

る十一人、花柳に遊び、百姓の女に戯れ、別業にありては晝夜顛倒の遊に一家をして皆病ましめぬ。夫人彼に嬲して、女芳子を生めり。

肉は壓かざること稀なり。夫の亂行は夫人の不幸と並び長じぬ。

妾は夫の寵を奪ひぬ。夫は親戚の間を絶ちぬ。先妻の女は事毎に彼の女を悪しりぬ。愛を求め得ず、自由を求めて得ず、離別を請ふて聞かれず。疑はれ、讒せられ、眞けられ、幽せられて、彼の女は世を果敢なみ、某月某日終に葉山別荘の土藏の二階に於て、短刀を以て自殺したり。

可憐の母！ 可憐の兒！

思ひ續けて、歩むともなく森戸の橋に來ぬ。夕日に明き諏訪臺に著しく響きたる卵壁の家は、問ふ迄もなき其の人の別荘なり。左手に見ゆるは夫人が自

殺したる一室なり。夕日は今其の玻璃窓を射て、金の如く閃めきつ。

予は橋欄に凭りて立てり。一羽の鳥あり、橋の彼方の松より起ちて、啞々と鳴きつゝ、彼の別荘の屋根を掠め、遠く山を越えて去りぬ。

日は沈みぬ。

光は夢の如く消え、地を掩ふて落つる黄昏の底に、予は默然として佇立ちつ。(自然と人生)

【評】 あれはハア秋田様の芳ちやまですよ、と聞きし作者は、思はずも振り回りにて彼方の岩陰に入る二箇の人を見た。そして、物悲しくなつて雙涙ハラ／＼と砂上に落し、可憐兒の身の上を思ひ、彼が母なりし人を思ひて同情にたへぬ胸の中や、讀み來りて思はず作者の筆に泣かされたのである。

可憐の母！ 可憐兒！は此の同情ある作者の筆の筆の如何にありがたからん。

平和の家

雪が消える、やがて青葉が茅屋を包む、後の山に鶉が鳴く、軒端に葛蒲を葺く今日は舊暦端午の節句、一家團樂して「耳くじり」の式を終へた。是れは長芋の小さなので耳に栓さし、本年中吉事を聞くやう凶事を聞かぬやうにと祝ふのだ、中座敷には祖母と父との爲めに二つの膳が据ゑられる。「私が給仕する、私がく」と争つて、良平は黒塗の盆を控へて、祖母と父の前に坐るのであつた。

五月の節句も過ぎて、向山に「ほつほく」と小鳥が啼いて、春の日はうらくと晴れわたる。良平の母は勇みたつて、「お、ほつほがもう啼いてる、昔から言ふてる、ほつほ鳥が来れば粟播時節だとさア、さアく衆人やれがどう」と鎌を荷うて山畑に登る。

「良平さん、今日は學校は休みかよ」

「あゝ休みですが」

「そんなら山に行くべいよ一緒に、山畑は面向いたア、山吹も咲いてる脚躑も咲いてる鶯も啼いてる、家の中に燻つて一日居るより身体には結構だよ」

「あゝ俺も行くべい」

母に跟いて山畑に行く。松樹に登つたり、竹を切つたり、花を折つたり遊ん

でる、やがて晝食時になれば、皆黙とる手を休めて松の下に席を敷いて、谷川の流を汲んで稗飯を嚼む。

春の日は西に入る。一家明星の光を踏んで歸る。飼犬「やま」が尾を振つて土橋の邊に出迎へる、鹿毛の馬は厩の中に衆人の負ひ來る春草の香はしきを嗅ぎつけて「ぶーッく」鼻を鳴して居る。

松の根を金皿に燃した燈蓋は、明るく席の御殿臺の臺所を照して、大きな鍋には一尾の鱒が煮られ、大祖母、祖母、父、母、兄、姉、良平、妹、僕、婢、皆集つて各目の前に木椀に盛つて並べられる。良平の椀には山のやうに盛つてある。祖母が自分の椀の中から肴の片を挟み上げて良平の椀に入れ、良平の頭を軽く叩いて、「此のですり」と云うて去る、皆がドット笑ふ。あとは靜かに夜

の幕が落ちて、圓かの夢に入る。(寄生木)

【評】 山里の一家の平和の様、目に見るやうに描かれて居る。「耳くじり」の式の様まで地方色がよく現はれてうれしい。殊に、良平の椀には山のやうに盛つてある、祖母が自分の椀の中から肴の片を挟んで良平の椀に入れて、良平の頭を軽く叩いて「此のですり」と云ふと、皆ながドット笑ふあたりは、確かに山里の平和の一家を描き盡して居る。

作者の此の筆に讀者も此の平和の一家の一人となつたやうな心地がするであらう。

海の日の出

枕を揺かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。午前四時過ぎにもやあらむ、海上猶ほの闇く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うて燦りたる樺色の横たるあり、上りては濃きプロシヤ藍色の空となり、こゝに一痕の弦月あつて、黄金の弓を掛く。光さやかにして、宛がら東瀛を鑽するに似たり、左手に黒くさし出でたるは、犬吠岬なり。岬端の燈臺には、廻轉燈ありて、陸より海にかけ、連りに白光の環を描きぬ。

暫らくするほごに、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ來たり、夜の衣は東よりに次第に剝けて、蒼白き曉の波を踏みて、此方へくと近寄る状も指點すべく、

磯の黒きに濤白くうちかゝるさまも漸く明かになり來りぬ。眼を擧ぐれば、黄金の弓と見し月も、何時しか白銀の弓とかわり、燦りて見えし東の空も、次第に澄みたる黄色を帯びぬ。森々たる海原に立つ波の腹は黒うして、背は蒼白く、夜の夢は猶海の上にさまよへぎ、東の空既に暁を開きて、太平洋の夜は今明けむとするなり。

既にして、曙光は花の發くが如く、圈波の廣まる如く、空に水に廣がり行き、水いよく白く、東の空ますます黄ばみ、弦月も燈臺も、われと薄れ行き、果てはありとも見えすなりぬ。此の時、日の使とも覺しき渡り鳥の、一列鳴きつれて、海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波といふ波は盡く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさゝめき、聲なきの聲、四方に滿つ。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空見るく金光射し來たり、忽然として猩紅の一點、海端に浮み出でぬ。驚破、日出でぬ、と思ふ間もなく、息をもつかせず瞬く間もなく、海神が手もて撃ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の櫛となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遅く、萬斛の金たらくと昇る日より滴りて、萬里一瞬此方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。(自然と人生)

【評】 大海の日の出を叙したるの妙文。銚子の海岸水明樓上より大洋を望み、曉の空次第にうすれ行きて、東の空次第に黄色を帯びて、弦月いつか見えなつて、東の空に金光射して大洋に日の浮び出づる様、實に讀者をして其の境にあるが如く覺しめる。然も一の冗語無く、引き締りたる章句、此の作者何を筆にしても、落ち付きて、讀者を魅する力の偉大なる、現代文壇他に其人無し。

偉丈夫の山

あゝ爾、信州の東門を鎖する淺間の山よ。偉丈夫の山よ。吾は爾を愛す。爾の頭を圓かに、うねりの豊かに、根ばりの大に、ゆつたりと千秋の波を大空にうたす姿の、圭角磨し盡して霸氣を銜はぬ偉人に似たるを愛す。

半峯以上は赤條々として少しも邊幅を飾るなく、朝日夕日に、雲霧に、雪に

霞に、随意の衣更へさして、己は悠然關らざるを愛す。

爾が腹の大に胸の廣きを慕ふ。輕井澤、沓掛、追分、御代田、小諸を始め、無数の村と人とを其が懐にかき抱き、人は爾が胸の邊まで木を植え、爾が腰に路を截り、爾が膚に物焼く煙を立て、死しては汚き骨を爾が上に埋れども、爾は容れて知らざる如く、無心の鳥は糞し、牛馬は踏み、草は花咲き、木は落つれども、爾は絶えて知らざる如し。千曲に足を洗はして爾が頭は天にあり。爾汗すれば人は浴して病を治す。

爾嘯けば氣は八州の雲となる。大なる淺間よ。

人は云ふ、自然は死すと。然も爾は活く。爾が腹中には烈火満つ。

誰が爾に狎るゝ者ぞ。萬古に騰る煙を見よ。煙歎。煙歎。靜かに上るは祖先

の焚きし祭天の香爐の名残か見え、怒つては、人の子の罪を警する上帝の狼火とも見ゆるなり。山を見て木と石と其の腹に潜む銀塊をのみ見ゆるもの、自然を死せりと云ふ者、神無しと云ふ者よ、來り伏して上帝の稜威を宣ふる淺間の鳴動を聽け。(青蘆集)

【評】雄大なる此の文章、大自然の偉姿を叙し、然も、信州の東門を鎮する偉丈夫、淺間山に對して、多くの讚美を呈し、山容をたゞへ、景物を慕ふところ、熱烈まさに發せんとするの妙筆、傑作。傑作。

夏の樂み

石も木も眼に光る暑き時節とはなりぬ。夏は暑しといへば苦しき様なれども、

暑の側らには涼しきあり、一掬涼風千萬金にも價し難し、「樂しみは夕顔の下涼み」嗚呼この樂しみや、眞に人生の最健全なる樂みにあらずや。
一家うち寄りて笑ひ興するは、夏を以て最上の時節とす。遠方に遊學したる少年少女も、避暑休暇には歸り來るなり。

迎へらるゝものゝ樂みは云ふも更らなり、迎ふるものゝ樂みは如何ばかりぞや。

慈母が夢に見し小童の姿と思ひの外、今は立派なる青年となり挨拶も大人びたるも興あり、家に在る幼弟、幼妹が人みちがひしつゝ、お客は何所より來ませしなどゝさゝやくも興あり、思ふに避暑休暇の今日此頃には、幾多の福島中佐は、日本國中の家々に於て歡迎せらるゝなるべし。斯く寄り集りたる家族相

携さへて旅行をなすも亦樂みの一事なり。生白き小兒の顔も、日に炙られ潮に曝され、鳥の子の如くなるも面白し、「涼しさは日の落ちかゝる海の上」沖の夕日の未霽れて涼風天末より吹渡る濱邊にひたひたとうち寄する波に足を洗はせつゝ、一家老幼うち連れて、逍遙するも亦妙なり。

或は峯高く、雲深き温泉に遊び、脚下に雷を聞き袖に雲を宿し、豈は夏なほ甜なるに、早くも溪間野邊に咲き出づる秋の草花を探るもよし。

獨り樂むは衆と樂むに如かず、避暑旅行には家族同伴すべきは勿論親しき間柄ならば甲家、乙家、幾多の家族相伴なふも可なり。家族の聯邦共和國は時によりては賑々しき樂事なり。併しながら興つければ各々その志す方へ別れ行くも可なり。臺所より外天地あるを知らざる主婦の如きも、せめては夏なりと

も、廣々したる天地に呼吸し、命の洗濯をなすべし。分けて老人などは、くよくと暑さ懶さを吐くのを愚をなさず、山青潮白の地に遊ばし延命不老の靈藥を飲むよりも幾倍の効能あらむ。

夏は小兒の天國なり、彼等が厚き重き綿服に纏はれて、起歩自由ならざる冬を過して、蟬翼よりも輕き衣を着け、コロくと、奔り廻る様の如何に勇しきよ、冬に匍匐したる赤子も夏になれば衣の輕きと共に体も亦輕きが故に、起つやうになるなり、伏すものは起ち、起つものは奔る。彼等が大敵なる感冒も來らず、更らに恐るべき馬脾風も來らず、若し飲食に謹まば小兒は夏に於ては無病息災なるべし。

されば夏は最も樂しき休息の時節なり、老人も小兒もその他恒に家に在るも

婦も恒に外ありて、俗務に従ふ主人も總ての家族皆うちつれて旅行すべし、これ衛生のためのみならず、亦心を養ふ所以なり。

若しさる餘裕なきものは、家内うち寄りて一個の板牀を庭に出し、松間よりチラリくと月の上るを眺め、老幼笑ひ興じて、月よりも大なる盤上の西瓜を割き、無邪氣なる話にて午後を過すも可なり。夏の時節を善く過せば命の洗濯をなすのみならず、亦心の洗濯をなすべし。身健なれば、心亦健なり。善根は快活なる心腸より養ひ來るを知らずや、快活の心腸は健全なる樂みより養ひ來るを知らずや。(山水紀行)

【評】美文として模範たるのみならず、修養訓として又服膺すべき妙文である。三伏の猛夏に屈せず、これを利用し、體を健にし、神を健にし、以

て心腸を養ふを教ゆ。編者は露伴氏の文を讀みて蘆花氏の此の文を讀みしが、露伴氏の文中修養に資するもの多く、且つ妙句極めて多かつたが、蘆花氏の文中亦青年處世の修養に資すべき妙句尠くはない。本句の如き其の一である。編者は此の一句を以て、吾人の處世に資する修養訓として三編措く能はざるものである。

世間猛夏に處するを説く人多しと雖も、此の作者の如く、これを美化し、詩化し、以て知らず識らず修養を説く人は尠い。

凄冷の氣

余はしばしば茂れる竹木を押分けて白川に下り、半ば渚に倚り半水に入る、

大盤石の上に踞して、足下を駛り流るゝ白川の流を注視せり。

此のあたり川幅僅に十數間、躍りても越えつべし。然も水勢は箭よりも急なり。前面には鬱々たる密樹の山、屏風の如く突つ立つて、絶頂空にあり、崖根深く水底に入る。白川の水此の蔭を流れて、深き黯緑色の水、岩に割かれて二ツにウネリ、石に解れて白き皺を作し、泡を沸し、妖婦の壓の如き恐る可き渦紋を畫く。知らず此の冷やかに笑へる水の底に何物かを藏さる。坐久うして一種凄冷の氣肌を襲ふ。

黒川に白川の落つる所、水は一大白の如く旋廻逆轉し、波湧き瀾立ちて、崖を削り、底を抉り、暗洞深淵其底を知るべからず。昔、藩士に水練の達人加來右衛門七とて大剛の士あり、藩侯の命により、此の二川落合の所に潛り入り

しに、久しく出でず、皆々驚き騒ぐ内、漸く浮み上りしが、顔色眞青になりて姑く言はず。後唯「彼淵には入るな」と、人に戒しめしと傳ふ。
余は平滑の白川を見るに慣れたり、阿蘇に行きて初めて山川を知れり。(山水紀行)

【評】 作者、「阿蘇に行きて初めて山川を知れり」と云つて居るが、此の白川の流れ箭より早く、前面に鬱林の山、屏風の絶壁を眺むるの胸懐、自ら大自 然の美感、快感を叫ばしむべし。作者の此の文讀者をして眞に其の境地に在るの思ひあらしむるの妙筆、徒らに讀過を許さず、「深き黯緑色の水」のあたりより「一種凄冷の氣肌に襲ふ」のあたり、實に讀む者をして、凄冷脊に迫るを思へしむる。

寂 寥

此の清水を過ぎて猶橋木の方に行く四五丁、鮎返りの瀧音己に明らかに山後に響くほとり、道の左右檜木の林茂れり。其の黒き枝葉は上より下より道を包んで、此處は晝も猶小闇く露けかりき。余は此處を過ぐる毎に常にキリンくくくと鳴く一聲を聞きぬ。此聲聞く毎に、山氣寂寞森として身にしむを覺えたりき。

キリンくくくく、唯一聲、山は愈々深さを増しぬ。小闇き檜森の冷たさも、一入増しぬ。唯一聲、見れば唯闇き檜の林なり、余は此の聲を聞く毎に、此れ即ち「寂寞」の聲。然らずば山靈の叫ぶにやあらむと思ひき。

余は思へり、是れ如何なる鳥ぞと。人に問ふも多く知らずと云ふ。
余は思へば、此れは鯛なりしなり。(山水紀行)

【評】 山深く奥に入りて、木立小間き中を歩みてあるの時、奇なる聲を聞く、
眞に寂寥を覚ゆるであらう。此の境を味ひし作者の、其の時の感想として
の此の文、そとろに讀者をして山氣の身に迫るを覚えしむる。

余は嘗て東北の深山に入りて、人の足跡もなきの處を歩みたる事があつた。
雑木林深く、雜草丈なすところ、小流れの音もいと微かにして、鳥の聲さ
へ聞かざりしの時、知らざりし聲を聞、チ、チ、と、聞え來りし時、
思はずも寂寥中、一しほの寂寥を覺えた。

今此の經驗ある余は此の山氣寂寥の迫る妙文に接し、今更にその時を思ひ

出されて、此の文を三讀、四讀、遂に暗誦を爲し得る迄に至つた。

十五夜

良夜とは今宵ならむ。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く、風涼し。

家業の筆を擱き、枝折戸開けて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木眞黒に茂
る邊に出でぬ。其の蔭に潜める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲
々、時々白銀の雫のボタリと墜つるは、誰か水を汲みて去りしにや、

更らに行きて畑の中に佇む、月は今彼方の大竹藪を離れて、清光溶々として
上天下地を浸し身は水中に立つの思ひあり、星の光何ぞ薄き。氷川の森も淡く
して煙と見ゆめり。靜かに立ちてあれば、吾側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、

月光を浴びて青光に光り、棕櫚はちや／＼と月に叫く、蟲の音滋き草を踏らば
 月影爪先に散り行く。露のこぼるゝなり。藪の邊には頻に鳥の影す。月の明き
 に彼等も得眠らぬなるべし。

開けたる所は月光氷の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を
 返して木蔭を過ぐるに、燈火のかけ木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。
 枝折戸閉ぢて、縁に踞す程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來
 りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。

月は一庭の樹を照し、樹は一庭の影を落し、影と光と黑白斑々として庭に滿
 つ。縁に大なる楓の如き影あり、金剛纂の落せるなり。月光其滑らかなる葉の
 面に落ちて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、其上にまた黒斑點ありてちら

く、躍れり。李樹の影の映れるなり。

月より流るゝ風梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影を相抱いて跳り、白搖き
 黒さどめきて、其中を歩するの身は、是れ無熱地の藻の間に浮ぶの魚にあらざ
 るかを疑ふ。(山水紀行)

【評】十五夜の景を叙する極めて微細にして、其の字句の洗練されたる、實
 に敬服する。此の文を読みもて行けば、身は宛ら其の境にあるの感が湧
 く。月光清く、すがくしく、遂に筆を擱きて、庭中を逍遙すれば蟲聲し
 けく、眞に胸のひろくとして落付くの感、何とも形容が出来ない程であ
 つたらう。

我も筆持つ身の、作者の此の境中にあれば、如何に之れを叙したりしか、

此の文世の文學を好み、文を創せんとするの人の好模範である。

雨 後

伊香保を出でける頃ほとく傘を敷ける雨は澁川に墜りて止み。水滑れる利根を渡りて前橋の方に半里も行く程に、雲は北へと移り去りて、傘日の光雨の如く除り来ぬ。

雨後日光に輝く渾物の色鮮かなるを見すや。見渡す限り渺々と海の如く、茂りたる桑の若葉は、一葉一葉に露を帯び、雨に洗はれ、日光を吸ひ、日光を吐きて、金緑色の焔赫々と燃え、晃々と照り、其の間々には大麥小麥の白金色の穂波をうたすあり。遠き近き新樹の村は緑より緑を抽きて碧に映り、赤き五

月鯉白き矢幅は遠近にそよぎつゝあり。其間々に純碧の霞をかためたる如き妙義、榛名、小野子、子持の絶々に出づるを見よ。其山々の間は趣路の山の雪、皎々と白きを見よ。此のあたり人家の家根には概ね菖蒲を植ゑたるが、折しも五月初旬の事なれば、濃き薄き、紫の花淺緑の葉まじりに簇々咲き出で、茅舎も芝簪して立つ思ひあり。涼しき風吹き来ぬ、桑の若葉は心地よけに身ぶるひして、惜氣もなく金剛石の滴々とこほし、人家屋頭の菖蒲の花は碧の空を撫でよふらく頷く。先程まで空の一隅に堆く積み居たる雲は、何時か融け、散り、流れて、今は風に梳かるゝ羊毛の浮々としたる、雲二條三條碧空に舞ひ、其れすら且つ流れ且つ消えつゝあるを見よ。心地よき眺めや。露を拂ひて桑摘む乙女が歌の野面に流るゝを聞かずや。

上州の平野の眺を是れより、余は平凡と思はざるべし。(山水紀行)

【評】春の景を受するに、うるはしき筆もてせられた、何を書きても巧みなる筆を持つ此の作者の、特に叙景にほれぐさせらるゝ程の味はひを現はす。

餘韻のある字句は、何處までも讀者を引つけずには措かない。此の文の如き殊に微細に叙し、如何にも春の、のんびりとした氣分がよくあらはれて居る。

流れの行末

成年の秋、十月の末であつた。自分は鹽原箆川の支流鹿股川の畔の石に腰か

けて居た。前夜風が烈しく吹いて、紅葉は大抵散つてしまつて川床は殆ど眞紅になつて居た。右も左も見上ぐる程の峯が細長く青空を劃つて、空にも川が流れて居るかと思はれた。秋來の事で木は瘦せ、涸れに涸れて所謂全石の川床の眞中を流れて行く。川床は峯と峯との谷間をくねつて、先下りになつて居るから、遠くまで流の末が見える。蛤川の末に一高峯が立ち塞つて、遠くから見ると川は其峯に吸ひ込まれるかの様に思はれ、又山が「此處に居なさい、里に出で何にする、居なさい、居なさい」と水の流を抱き止める様にも思はれる。併し水は底の石を洗ひ、紅葉の柵を潜つて、歌ひながら流れ行く、石に腰かけて、聞いて見ると、其音、松風に人無くして、鳴る琴の音、何に譬へて宜からう？ 身は石上に坐しながら、心は流水の行末を追うて、遠く遠く、遠く――

「あゝまた仄に聞える。
今まで半夜夢醒めて、心澄む折々は、何處にか遠く遠く此の音が聞えるので
ある。(山水紀行)

【評】 春の景を叙してうるはしき文を綴りたる作者は、今、秋の景を叙する
に飽くまでも秋の氣分をあらはし、「蛤川の末に一高峯が立ち塞つて」の
あたりから「水の流れを抱き止める」のあたりまで、何とも云ひやうの無
い味がある。
又「併し水は」のあたりから「あゝまた仄に聞える」の邊まで、如何にも
よく秋の景がうき出て居るやうな感じがする。

人生

雪がまだ融けぬ。
夜、二疊の炬燵に入つて、架上の一冊を抽いたら「多情多恨」であつた。器
械的に頁を翻して居ると、つひつり込まれて読み入つた、ふつと眼を上げる
て、向ふには鶴子が櫓に突伏して好い氣持ちにスヤ／＼寝て居る。
炬燵の上には、猫が咽も鳴らさず巴形に眠つて居る、九時近い時計がカチ／＼
鳴る。臺所では細君が皿の音をさして居る。
茫々たる過去と、漠々たる未來の間に、斯一瞬の現今は楽しい實在であら
う。

また、さら／＼と雪になつた。

余は多情多恨を讀みつゞける。何と云ふても名文である。柳之助が亡妻の墓に雨のしよほく降つて居た葉山に語る條を讀むと、青山墓地にある春日燈籠の立つた紅葉山人の墓が、つと眼の前に現はれた。忽ち其の墓の前に名刺を置いて落涙する一青年士官の姿が現はれる、其れは寄生木の原著者である、彼の青年士官彼自身最早故山の墓になつて居るのだ。

皆さつさと過ぎて行く。

「御徐にー」

斯くいひたい。

何故人生は斯うさつさと過ぎて往て了ふのであらう。

【評】 現在は一瞬にして過去になつて了ふ。作者は此の一瞬の現在に處して

過ぎ去りしを思ひ浮べ、無限の情を叙べて居る。

此の短かい中に、眞に深い深い味の籠つて居るところ、讀者を魅して、惜しき現在を最もたのしきものと思はしめる。

余は此の文に接して、今更ながら、人生の過ぎ行くことの早く、一瞬にして過ぎ行く現在を惜しまれてならぬ。

噴泉

湯の谷に熱湯及び緒泥を噴出する噴泉あり。竹柴の類を以て厳しく籠を設く。

樹木の間を潜りて棚の上に出れば、大釜より迸しるが如き白氣、濺々たるが中に雷の如き響きあり。心を静めて、白氣の間を透かし望めば、方數十間烈火もて焼き拂ひたる様に眞黒に燻ほり、岩も土も一齊に黒鐵色をなしたり。猶心を静めて見れば、其鐵色の岩の間、黒洞々の坑大小二つ杳然として地心に達し、大なるはやゝ傾き、小なるは眞直に穿ちて、一道の熱湯白氣坑口より迸る勢宛ながら三十珊の彈丸砲口を離るゝが如く、熱き飛沫八方に降りて、地は頻りに震ひぬ、稍々おだれて見ゆるかと思へば、忽ち加一倍の烈しさを以て迸出す。

熊本より阿蘇に向つて行く旅客が、蘇山のやゝ半腹とも覺しき所に一條の白煙を認むるは即ち此の噴泉なり。

【評】 熱湯噴出し、白氣迸しる様、眼前に見るが如く描されたる、實に妙文である。熱き飛沫八方に迸しるが如き感を抱かしめ、讀者をして宛然其の境地にあるの思ひあらしめ、物凄き、實境を思ひ浮かばしめる。

僕の家

千歳村と云ふのは、東京の西三里、多摩川の東一里強、甲州街道を北の隅にして、所謂武藏野一隅に集くふ戸數五百餘の農村である。八つの字があつて、中央部落が粕谷と云つて戸數僅に二十八軒、二十八軒の中一番小さくて、淋しくて景氣のいゝのが僕の住居だ。低い丘の端で、前は浅い谷からだら／＼上りの丘になり、雑木林に東々北の一部を圍つて、南面獨立。日もあたる。風もあ

たる。西は麥畑から村の杉木立や雑木林、其上に相武甲の連山がちよいくと顔を出して居る。裏へ出ると、富士も見える。バナラマの様な眺めで、些單調だが、大空は存分眺められる。總じて武藏野のウネリ様は小スケールの露西亞式で、唯其ウネリが小さく、山が見えて樺の林のかはりに、樺林があつて、農家に牛馬が少なく、赤いシャツがなくて、百姓の顔が少々ばかり気が利いて居るだけだ。僕は此處に居てしばし一昨年露西亞の遊を憶出す。僕の家の向の丘に青山街道がうねつて居る。時々荷車のがらくが聞える。僕はきつと「うびき」の「から車の音が虚空に響き渡つた」の句を念ひ出す。併し露西亞の暮秋の寂味も、冬の死も、従つて春の復活の喜も、此邊では十分わからぬと思ふ。

春は兎角風が多い。村の家々はいづれも杉木立や檜の防風林に籠つて、遠方から見るとながしの宮かと思ふ。二月から三四月にかけては、あまり風ばかり吹くので、蓮月の歌ではないが「風吹かぬ日は淋しかりけり」だ。僕の家のぐるりの檜の木にハリガネが三本からむである。其一端は家の梁木に巻きつてあるのだ。風のあて加減も、家の大きさも大概分かるだらう。此邊の土は噴煙土とか云つて、火山灰質の輕少極まるもので、些風が強いと一齊に雲と舞ひ立つて、遠望は火事を欺き、近くは鼻の穴、押入れの奥まで侵入する。あるけば疊に足跡がつく、一晝夜も吹通しに吹かれると、實際くたびれてしまふ。僕の家は出来てまだ十年位、比較的新しいものだが、普請はお話にならぬ。其若き、先の家主なる者は素性知れぬ捨子で、赤子の時、村に拾はれ三つの時

に人に賞はれ、二十いくつの時養家から建て、貰つた家だもの、其男は農が嫌で、蘭商法をやつて、失敗して、東京で死んだ。其あとには近在の大工の妾が五年ばかり住んで居た即、妾宅さ。妾宅と云へば、一寸小意氣に聞えるが、まあ云はぬが花だ。花と云へば其妾の名がお花さんと云つた。お花さんと云へば——いや此も云はぬが花だ。投げやり普請のあとが、大工の癖に一切手を入れなかつたので、壁は落ち放題、床の下は吹通し、雨戸は反つて、屋根裏は半腐り、些真剣に降ると黄ろい雨が漏る。越して来たのは去年の此頃、雲雀は鳴いて居たが、寒かつたね。日が落ちると、一軒の茅屋目がけて、四方から押寄せて来る武蔵野の春寒、中々春寒料峭位の話ぢやない。おまけに、井が赤土水の上に湯水と来たので、僕も當分は毎朝手桶を荷つて、四丁餘り矢張玉川を

行つた品川分水へ水汲の役さ。風が荒いのと、水が硬いので、手足は忽ちひびあかぎれ、六疊二間に道具に塞がる。贅澤こそしなかつたが、兎に角二十圓屋賃を拂つて、小間の二つ位は占領して居たあとだから、御臺所も流石にほろく落涙なさる。誰も無理に頼むだのぢやあるまいし、自分が好きで擇むだ生活。今更苦情を持たむ所はなし、老人子供が無い素夫婦だから面白半分やつつけたもの、時にはウンザリした。

【評】 作者の住つて居る千歳村の家粕谷を細かく叙してある。村の地理、景色等遺憾なくあらはれて、然も作者の住宅の有様、住宅に就てのローマンスなども面白い。作者が家庭内の仕事まで手傳つて如何にも圓滿な平和に生活をして居るのが想像される。

初 對 面

半夜の失策に夜は明けはなれて東の森の上には日さへ出でたれども、時計を見ればまだ三時やゝ過ぎたるのみ。あまり早く訪はむは心無きわざ也。しばらく休息と、腰掛の上に横になりたれども、もとより眠られず。ゼキノは小さき停車場、一隅には例の聖像を飾り、卓子の上に紫のインキ壺とペンを置きたるは郵便局を兼ねるがために、今起出でし若き男眼を摩りつゝ湯沸に火を入れつゝあり。一人の年老いたる百姓來りて馬事をすゝめ、伯トルストイ、伯、伯と云ひて飲み込み顔に頷きぬ。邊幅を飾らぬ翁の事にてあれば、客は着飾るにも及ぶまじく、また着飾るべきものもなければ、せめて此文はと眞黒に汚れ

しシャツを白きに更めて、顔を洗ひ、嗽ぎ、起ちつ、居つ、ほとりの樺の間を歩みつ。漸く五時近くなれば、いでや行かむと馬車に打乗りぬ。馭者は例の眞面目な鈍な顔の老百姓、馬車は太き轍の露西亞式也。馬車は西北を指して徐に熟せる麥圃の畔を行く。矢車草千鳥草など麥にまじり咲きたり静かなるかな露西亞の夏の朝。日は早や高けれごもきらめかかで睡けに、遠き林には霧迷ひ野づらは一面白き露の海、何處には鶏鳴きぬ人は見えす。身は半夢心地に馬車に揺られ行く。麥の穂末に青塗の寺を見つゝ、停車場より一時間ばかりにして一の小村に出づ。此はヤスナヤ・ボリヤナの村也。薬蕈、板蕈の倭屋兩側に並び、幅廣き中間の道は草生ひたり犬吠え、跣足の子供ほんやりと立ちて見る。馬車は村の立つ低き丘を下りて、西へ緑青色に塗ら

れし圓錐形の屋根ある番小屋附の門を入る。小屋は空しく、門は常に開放と見えたり。左手にめぐり四丁ばかりの池あり路は洋杉、菩提樹、白樺など青々と茂れる間を上ること一丁餘、青塗の屋根、白壁二階づくりの家あり。木立に北を塞がせ、三方林を排いて東向きに建てらる。枝も撓に實れる林檎の枝を潜りて、馬車は其の家の西側の入口にとまりぬ。賃を拂うて馬車をかへし、良人しく佇めども一人の出で来る者なく、家内は寂たり、時計を見れば七時少し過ぎぬ。やゝありて白胸掛せる八字髭の僕らしき男臺所の方より出で来る。手眞似にて眼り居らるゝやと問へば頷く。余は荷物を女關に片寄せ置きて、裏の方に出でぬ。夥しき林檎畑、草生ふるまゝにしあれど、樹はよく培はれて何れも枝折るゝ程に實れるを、柱もて支へたり。林檎畑より引返してまた先程見た

る池の畔に下る。家鴨十數羽水に泳ぎ、池の畔に洗濯する婦人あり。赤松の間を二頭の馬の可笑しき足並してヒヨコく飛びつゝ草食ふをよく見れば走り去らせじと前足を互にゆるく結びたるなり。池のほとりに腰下ろして、夢見心地に眺めける程に、門の方より草搔きを肩にし、湯鍬を提けて農婦の來りしが、あと追うて來し五ツ六ツの赤シャツ一枚の男の如何やらんせびるをふりかへりてつゞけさまに五ツ六ツ脊をくらはすれば、子は大聲あけて啼きわきめつゝ村の方へ走せ去りぬ。

余はやをら立上りて、家に通ふ道を横ぎり右手の木立に入りぬ。此處には周圍一丁餘の池あり。水草白く花咲き、池のほとりに水浴の衣なご脱ぐ可く床かきて藁むしろ下げたり。池を周りてやゝ下れる所樺の木に青塗の狭き板の

腰掛あり。余は暫し憩はむと、コルクのヘルメット帽を枕に、インブアネスうち被りて仰向けになり、うとくと何時しか夢心地になりぬ。

良久しくして人の近寄る氣はひあり。つとめて重き瞼を開けば一人の老翁吾側に立てり。庭園の掃除に來し百姓爺かと思ひしは一瞬、まがふべくもあらぬ翁の顔に、刎ね起さるより早く「おゝ、君はトキトミ君」と翁は齒ぬけて子供こどもの如く可愛ゆき口もとに笑を崩して手を差伸べぬ。余は「あゝ、あなたは先生」と緊に握りし其手は大にして温かなりき。

「君は余の返書を思ざりしならん」

「御返事？ 御返事は見ずして参り候。坡西土より差上げし手紙はとどき候也」

「とどきたり。送られし書も讀みたり。余は君に返書を出す前に餘程考へたり。許されよ。」

こゝに翁は余の手をほとくとたゞきつゝ、

「余は君の手紙を信する能はざりし。其はあまりに喜ばしき手紙なりし故なり。故に餘程考へて返書を書きたり。君の手紙に書きし所は眞實なりや。」

「無論眞實に候。眞實なるが故に、露首を許し玉へ、先生の存在中に一度先生に對面せむと推參致しぬ。先生の健康如何。」

「甚宜しからず。余の死後は遠からずと思ふ、皆死を恐る。然れども死は解脱也恐るべきにあらず。」

翁の顔を見れば、顔の色は紅を帯びたれど髮髯灰白の色となりて、眼少し

うるみ、齒ぬげ、思ふにまして老いたり。翁は滿七十八なり。我等は今立話したる彼腰掛の邊を去りて翁は前に立ち、余は從ひて、逕を下り、又一つある小池の邊を話しつゝ行く。白つほき鼠フランネルのだぶくしたる着物には黒き革の帯して、縁廣の白き夏帽をかぶり、自然木のステッキをつきたる姿は何處までも晝に見、文に讀みたる其儘の翁也。翁は十年前に翁を訪ひし家兄の消息を問ひ、深井君の近狀を問ひ、而して談は翁の近業に及びぬ。翁の曰く、「余の餘生は長からず、然も一刻存すれば一刻の務あり、余は目下政府と人民の關係につきて著作中なり、既に半稿を終へぬ。」と、而して翁は日本の政況、農と商工の比例を問ひ、「土を耕し他の力に頼らずして生活する者が國の力也」と其持論を出し、日本も田舎の子孫田畑を賣りて學問に都に出て來る者衆しと聞きて

成程と頷き、終に余に向ひて「君は農集によつて生活するを得ざるや」と問ひぬ。余は「農業は最も好む所に候。余は尺寸の土も有たされども行々は少くも半農の生活をする心算に候」と答ふ。

池の端より歩を返して、家の戸へ縁蔭幽草の逕を上る。バクソカツブ、翁、菊の類、牡丹色の梅鉢草とも云ふべきもの、白に黄に紅に咲きて草を彩る、こゝに今しも大鎌を磨き終れる農翁あり。翁は二言三言交へたるのち、杖を捨て、やがて鎌を取上げて、ざくりざくりと切味を草に試む。余も不器用なる手つきにて二三度振り試みつ、また行きし程に、八と六、と當戲の子を保姆の連れて樹下の腰掛に遊べるあり。此は孫也とて、翁はわかるがわる子供に接吻す余も其手を取りて、今日はと云ふ、翁頷きて曰ふ、モヨー、ボチニテー、

甚好、甚好、と。斯くて我等は家のほとりの廣場に出でぬ。白き砂地、二三の小さき花壇を設けて、草花美しく夏の日にかじやく枝さし覆ふ楓に白布かけたる長き食卓あり。銀製の湯沸音を以て、茶器、クリーム、パンの皿新着の郵便物などのせあり、そして翁は五十ばかりの頭禿けたる革帯の紳士に余を引合はせぬ。此は醫師マコ井スキーとて墮境の人、戦争中野戦病院に働き、久しく當家にある人なりと。(トルストイ研究)

【評】トルストイ翁を遙々と訪ね行きし作者の、其の訪問記である。慕ひ慕ひし先輩を訪うて、面語するまでの苦心、面語しての狀態、なかなか細かに、然もト翁の面目を描くこと極めて細く、翁の一舉手一投足も漏らすまじと努めて居るところ、さすがに敬服する。我文壇の先輩の筆とうなづかれるる、而してト翁の面目を躍如せしめ、吾人をしてト翁に親炙するの想を湧かしむ。

霧

霜の極めて劇しき朝は、相模灘の水蒸氣霧の如く立ちのぼる。今日、午前七時半、高きに上りて望むに、田越川より相模洋にかけて、唯一面蒼白き水蒸氣、濛々として煙の如く、遠くして富士、近くして小坪の岬、僅に半身を露すのみ。江の島も初めは隠見したりしも、終にかき消されぬ。足柄箱根は襲ひ上る水氣を防ぎ兼ねて、しばしば姿を隠す。

七時四十分、日や、高く上りて、満目の水蒸氣忽ち透明なる薄紫の色にな

りぬ。日の蒸すに従ひて、相模灘上の紫氣いよく勢猛く騰上して、江の島は全く影を没し、足柄箱根も辛うじて寸ばかり頭を露はすのみ。一秒又一秒、水蒸氣の勢宛ながら猛火の畑の如くますます渦き上りて富士の半峯と、小坪の岬の巔を除くの外、盡く群山を隠蔽し、侵蝕し、沸々として底止する行を知らず。日は之れを煽ぎて、満目の紫招幢々としてまさに天心を衝かむとす。
七時五十分。日は遍ねく水蒸氣の中に滿ち渡りぬ。洋上に瀾漫したる紫の水氣は流石に日の力を感じて、處々に割け目を生じ、思はぬ方に海の一線を見せ、思はぬ空に山の一角を露はし、富士先づ脚を脱ぎて、足柄箱根の顔を見、江の島紫烟の絶え間より笑み、海と山と漸やく界を劃して、小坪の岬赫奕として日麓に及ぶ。

時更らに移りぬ。日の力いよく加はりて、残煙剩霧狼籍として海に山にただようものゝ夢の如く消えて痕なし。相洋豆山新に開闢にあへるが如し。金帆あり、二三、江の島のはづれに閃く。三羽の水鳥あり、洋上に大なる圈を畫きて飛ぶ。

八時過ぐる五分。(山水紀行)

【評】 海上の寫實、筆極めて軽く、然も微細の變化も漏らさじとつとめたる作者の努力は敬服の至りである。

湯

湯は後山草木の間より湧き出づ、一二條の筧を傳へて、湯小屋に落つ。湯小

屋は三方板壁圍み、前面一方開け、石を舗き衣棚を設け、格子を設けて男女を分けつ。湯坪に五坪ばかり、底に清砂を敷き、湯は瀧をなして笕より落ち、槽隅に穴ありて陳水を送り去る温泉明礬色を帯び、清瑩玲瓏、槽底の砂個々數ふべし。

此の外熱、徹温の兩湯あり。

【評】 短かい中に、多くの努力あり。

漂泊の少女

永劫に寂しい風がそよよと吹く。その風に裾を吹かせつゝ少女は悄然として歩いてゐると頭髮が頬の邊を軽く翹つて風に從つて漂ふのである。空はどん

よりとして、紛糾つた夢の凝固でもあるやうな白い雪が廣野の北東の方へと動いてゐる。そして鈍い日の光が雲間を洩れて若葉の上に流れてゐる。

しとくと降つた雨が晴れて、野末の杜の濡色が鬱然と黒すんで今は蘇生つたやう。西方、幾億幾十萬里、遠いか知れないけれど、さながら消えた記憶を満へたやうに澄み透る青空がさえくと微笑んで見える。

少女は立止つて、鳥の飛び去る彼方を無心に眺めて、此の夢から醒めるやうとしてゐる自然の影を想に惱む目の裡に映してゐる——空い空も——小さき鴨も、——而して遠く、杜の彼方に憧れてゐるかのやうに歌を歌ふのである。山を埋めし雪消えて、木樵は森に入りにつけり、ゆうざりくれば雨しとくと、谷の櫻花はけふも散る。

何となく明るくない沈んでるやうな景色の寂しい野原には溜息のやうな北西の風が習々と吹渡つてゐる。

少女は竹んだまゝ、草の葉の上に置いた白露を熱と見入つた。熱々と見結てゐると、其の露の玉の裡に瞭々と見える山や、河や、昔戀しさ我が故郷の光景が浮んで来て、寄る年波の白髪のお婆さんが例の小窓を開けて何か言はうとして自分の方を見てゐる……あゝ、懐かしい、あれは叔母さん？　だ。小女は恍惚として、ありし昔を胸に思ひ浮めた。

或初夏の日の山吹の花の咲く時分に、ぎら／＼とした日光を浴びた病院の硝子窓や瓦屋根、見るからが熱さう。自分は母親の病氣を心配して、其の病院の

垣根に沿ふてやつて来ると日の光の減入る青葉は風にそよいで何處ともなく溢れて来る薬の香が薄る鼻に浸みて、胸は穩かでなかつた……さて山吹の花が黄金色に何に觸れるとなく獨りでに散る垣根を曲ると、そこが病院の門前、一枚の戸板が置かれてあつて、女の病人が白布で頭を繙帯して、今載せられて行く處であつた。

叔母さんが桑畑に桑を摘んでゐると、自分は桑の實の赤いのを探ねて赤犬と一しよに畑の中に彷徨てゐた。すると遠くの方で飴賣の喇叭の音が聞える、自分はその方へ走つて行くと意地悪のお花さんが、自分を遣るまいと途を塞ぐ。やがて聞くうちに眼氣の催す喇叭の音が漸々と遠くなると、見ると直向うの若

葉の繁る森陰に屋臺があつて、そこに建てられてある赤い小旗がちらく、まざぐくと見える飴賣爺さんの後姿。

種々雑多なことが油然と一時に小さな胸の裡に浮んで来ると有りし昔が悉く目の前に見える。さながら白露の裡に漂うてゐるやうな心持。少女は小さな指を差出して危なさうにさも怖ぢけたやうに其の白露を摘まもうとすると、小さなく玉は碎けて、もうく決して二度と再び其の葉の上に同じ白玉を見ることが出来なくなつた。

少女は遽かに悲しくなつて、はや目には一ぱい涙ぐんだのである。寂しい風は野原を吹いて、白雲は北東の方へと流れて行く。

そもく、此の少女は世に薄命な孤兒である。此年までも故郷にゐるたゞ一人の叔母の手に養はれたのであつた。……母親の顔だけは、消え去らうとする樂の音などのやうにほんやりと覺えてはゐるけれど、春、花が咲いて花見の群が通らうが、秋、時雨が降つて木の葉が散らうが、嬉しいと思つても、悲しいと思つても泣いて縋ることも出来なければ、再び此の世で物いひかはすすがない。で、たゞ一人の叔母を慕はしくも、懐かしくも思ふのである。それが去る年叔母一家の事情で、三百里も離れた親戚の家に預けられることゝなつた。

あゝ、漂泊の人生に尙も浮き草の宿を重ねる此の少女の身こそ哀れである。此地に来てから、もはや三年、日毎に此の野原に来て、誰を友とするものも

なく、獨り歌うて獨りさまよひ、飛ぶ鳥の影の行方に憧れて、一雨雲の漂ふ故郷の空を見、森や林を痛ましても眺めたことがある。(未明、叔母の家)

【評】此の作者のローマンチックな匂いのする書き振りを遺憾なくあらはして居る。シンミリとした、人を引きつけて、涙を落さないでは置かぬところ、傑作として採る。

愁 人

鋏形草

たとへば深緑の朝夕に影ひたす明星の光のやうに、勿忘草には稍大きい花辨を、浅黄と白とに染め分けて行く水近き徑の畔に咲き亂れた、名も知らぬなつ

かしの野草があつた。自分は郊外の往復にいつとはなしに、深い〜執着を此草に覺えたのである。

小さき花を戀ふる我心は先づ其名を知らんとして悶えた。一日圖書館の棚から「ワイルド、フラワー」といふ新着書を引き出して、挿繪をたよりに索めて行くと、果然、まがふようもなき彩色の、梗も葉も確にそれと認むべき一種の見當つた時には、丁度戀人の名を知り得たばかりの嬉しさに動かされた。

スビード、ウエール

けれども自分はどうしてもスビード、ウエールの和名を知る事が出来なかつた。けれども此花の鋏形草である事を教へて呉れたのは、じき數に入つた久田二葉君であつた。未だ見ぬ友の賢輝君であつた。二葉君と僕との交誼は此優し

い蹴形草を媒として互に其感情、境遇を殘る限もなくうちあけて、百年の友を以て相容して居た。噫、けれども二葉君は竟に末見の友として、不意に、西ヶ原の客窓に病死した。

さらぬだに孤獨の今日一友を失ひ、明日また一友と別る。荒村逝き、伴なれ逝き、今又、二葉を失つた自分は、暴風に群を離れた砂漠の旅人ではないか。まだ水に雪の味ある此程の事であつた。戸塚の野徑を踏むで、目白の停車場へ急いだ時、とある流れに沿ふてこの蹴形草が、まだ薺の花も見えぬ春寒に美しく咲いて居るのを見出した。餘りのなつかしさに佇んでながめて居ると、また新しい悲哀が胸に湧く。想へば二葉君が手紙の度に頻りに會見を促して居たのも、それとはなしに自分の薄命を意識して居たのであるまいか。

蹴形草は愁を惹くの花となつた。じき友の紀念となつた。自分は此花に對してもう昔のやうに、惹き想を寄する事が出来なくなつた。(秀湖、愁人小品)
【評】 人生と自然の一小品ではあるが、よく筆の力があふれて、やるせなき詩人の思ひが、あらはれて居る。

圍 爐 裏

雪の晴間と見えて、雲切がして青空が出て、鬱陶しけな空合は穩かならぬ景色である。小山の頂に松が五六本、北風に吹かれて、狂ひつ枝を鳴しながら、低く垂下つた灰色の空に接吻してゐる。其の松樹の下に小さな破家があつて、今にも吹き飛ばされはせぬかと思えるばかり。

此の薄暗い天氣に、圍爐裏に松や、檜の枯葉を焚いて、頭の禿た六十餘の老爺は考へ込んで、燻る煙に顔を擧めて涙くなみながら反体になる。一縷の青煙は、つるくと小窓から出て、斯様な調子で安全に天まで昇ると思つたのが、ひゆうと來た風に魂消て散ばつて、逆も敵はぬと言つた風に意氣地なく消える……後からく……自分が好んでか……それとも運命でか……又は深い考へもない無心でか……我もくと追ひ付やうに出て來る煙は皆な斯のやうな死地に赴くのである。たゞ暗い沖の、白い怒濤が手に取るやうに此窓に立つたならば物凄く見える。(未明、吹雪)

【評】雪の晴間の田舎家の様がよく描かれて居る。北國の村に行くときよく斯う云う様が見られる。圍爐裏に松や檜の枯枝などを焚いて、股火をしなが

ら、燻つた顔をして六十老爺が、臭い煙草を喫んで居る様なき、ローカルラーがよくあらはれて、宛も北國の雪の日の、田家の様が眼前に浮かんで來る。

汽車の窓

日曜だから泊つて行けと云はれたが、今日は日曜でも明日は學校がある、是非歸ると云ふと、そんなら東京へ宜しく、それから序があつたら祖爺やお袋に開業の模様を書いてやつて呉れとか、北海道へも云つてやつて呉れとかお祖母様が云ふ側から、叔父は、忙しくつてまだ何處へも手紙を出して居られなかつたと云ひ譯する。

四時過ぎの汽車で東京へ歸る——師走空の曇つた日で、窓は閉めても寒いこと。汽車は間もなく南部武蔵野の平野を過ぎるのだ。町を離れて野に入り、村を出で、は林を見る、水田のあちこちに疎ら立つ様の木や、榛の木を支柱に積みあけた稲村や、野道を行く荷車、川端に傾く藁葺小屋、川の末には海の色青白く、風に吹かれて忙しげに走る汽船の煙——初冬の風物慘として、車中また笑聲を絶つ。

夕飯を済まして行けと云ふのを辭して來たので、急に空腹を感じる。「オ、然うだ。」

と餅菓子の喰餘しを包んで呉れたのに氣が付いて取出したが、「宛然子供扱ひだ。」

と思ふと可笑しくもある——もう一と月経てば二十四ぢやないが、然うだ、更に一年を加へれば二十五になる。人間の半生と云ふ二十五——孫に當る自分の男となつたにお氣が付ぬか、否、自分ばかりか三十越した、鬚の生えてる叔父貴を子供扱ひにするお祖母様……あゝ、それ程に年寄られた——

汽車はいつしか六郷の河原を馳せる。

右に左に桃林——それも然し名ばかりで花も葉も實も悉く「時」と云ふ鬼の手に撈り去られた今は、たゞ醜い幹や見すほらしい梢ばかり——と見ると線路を離れて南の方枯蘆が蓬々と亂れて立つ。

「見給へ。」

と友あらば黙想の袂も引かう——

「煙が、火が……」

蘆の茂つた間が少しく陥没つて、鉛のやうな溜水のある傍に、百姓らしい二人の男が焚火を圍んで立つて居た。煙は白く、火は黄に赤に、立てる人影は瘦せて見えた。夕暮である——落莫たる六郷原頭の夕暮である、加之また、チラ／＼と雪でも降りさうな空模様

フット汽車は矢のやうに過ぎた——火の暖かさを思ふ間も無く——

蘆が枯れて、水が湛へて、焚火の傍に人が居る。而して煙は空にのほり、火影は水に映り、——誰やらのスケッチにでもありさうな——端なくも故郷の事が思はれる。大人の後に跟いて枯木を拾ひに谷間へわけ入つた折の事が思ひ出される。さてその故郷の湖水の畔も、今は、今夜あたりは、雪か霰の降ることだ

らう。

「山ある國も山なき國も、自然はかくて老いて行く……」

斯様な事を考へながら窓から外を見續ける。無論もう火は見えぬ、煙も見えぬ、而して汽車は一秒毎に繁雜な都會の方へと走り行く。(星湖、焚火)

【評】 婦省せる一青年が、上京する汽車の窓から、ん／＼と故郷をはなれて行く、窓外の景に眼をやりつゝ空想に耽つて居る、如何にも細かく窓外の田園の景がよく書かれて居る。

熱 血

牛込〇〇町の居酒屋は、貧民、労働者の帝國ホテルだ。

此處に入る、頰冠、古麥葉帽子の連中は、黄金の鎖とも見るべき繩暖簾を潜る。

夏の日暮、今ま酒宴の最中である。四五十の眼が、臙臙として物悉美しくみえる。——一枚板の長い艶臺の上に、洋盞が離々と並んでゐる。それが、白銀の高盃、水晶の飯具のやうだ。

囊中錢有りや否や、古樽の王座に、車夫、馬丁、土方と職工と辻藝人の徒だ。孰れも傲然の態度——三人の女中（腐れた無花果の面と年増と、薙に似た少女）が、聲に應じて大塚から、滾々と注ぐ、——焼酎、ブラン、葡萄酒が、荒格子から射す夕陽に映つて、白に、黄に、赤に、勿々に綺麗の上に各々虹霓のやうな氣焔や管が、縦横に放發される。其れは、恰度、佛蘭西や露西亞の物

語に在る。彼の居酒屋の光景を偲はれる位で。

神経家的の狭い類に、長髪を時々搔上げ乍ら、詩人東野破琴は、エルレイン然と控へて居る——。平生も冬の青空の様な顔が、酒氣に夕焼雲の色がほんのり、最早兩頬は、火のやうに熱る。美しい鋭い瞳を昂けて、何だか演叫ばふとして、齒に噛み殺した。咽喉元へ突上がる思想感情が、泡と化つて引結んだ唇から流れる。

世界第一の火山國の地上に、火山的の不平詩人が、例の猛烈なるやつを吐いたら、溜つたものでない。彼等醉漢の面々は、狂熱に煽られて、赤裸々に市中に飛出すであらう。（しかし、元來が百年生きられぬ弱い人間だ、五尺の體で何の大活動が能る。亂暴の醉漢が双手を揮つても、家や壁や鐵に當れば、腕は脆

く草のやうに折れる。天を高く衝けるかの、地を深く足で穿たれるかの、人間は到底自然に勝ち得ない。

溢るゝ逆潮は胸に引いたが、直ぐ涙みを催すには、貧民連が僅かに火酒で、元氣を買ふ姿！學問の無い代り没野心の愚なる顔！獸と鳥と虫に似た亂調の聲！悪酒に脚を奪られて、泥溝に墮る風！アルコール中毒に見舞はるゝのを、彼等とて知りつゝも猶、現世の苦闘に耐へ難く、敗者は武器を一堂に收め、美しい文明の日蔭者は、妻子をも忘れ、家を身をも忘れて、盃中に沈溺してゐる可憐さ！待合の紳士が、色海の鯛や鱈や鮫なら、彼等は水溜の子々だ。(花外、悲しき賢者)

【評】 熱血詩人の熱血あふれ、飽くまでも熱と血とを以て綴られた此の文、

讀む者をして、其の狂熱の焰を以て巻き包んで了ふ。

眞夜中

眞夜中である。不圖、心づいて見ると、自分は曠野の中に立つてゐる。

空と地との間には茫と霧が立つて居る。薄青い月の光が、其を透して、見える限り灰色の地を、冷めたい青白い色に見せて居る。

自分は、力なく身体がわくゝとふるへながら、的もなく歩き出した。……

この野は草も木も、冷めたい土が露に見える外、何物も無い、はてしも無く、青白い月の光に照らされて、自分は的なしの道をたどつて居る。……なまぬるい風が折々そうつと頬を掠て吹きすぎる。腐つた重つくるしい感じがする。

歩きながら、もうこの世界中の生きたものが凡て目を閉ぢてしまつたと思つた。自分が獨り最後の道をたどつて居るのだと思つた。……と思ふと、眼前の景色は瞬く間に變つて居る。冷めたい灰色をして見えたのは、累々と横はつて居る裸体の死骸であつた。……自分はその死骸の上を歩いて來たのだ……そして現に一つの死骸の上に立つて居る。

ふと、蠅の肌になつた様な、濕つた冷めたさを感じて、身の中がぞつとした。自分は立ち止つてほんやりと考へた。

こゝに至つて、自分は初めて心がはつきりして來た。眠つて居た様々の記憶が明かになつて來る。(葉舟、月下)

【評】 人生を書いたものだ。神經的な此の書き振りは、人を魅して、妙に恐

ろしいやうな感じを起させる。努力の跡のありくくと見える作だ。

斃 馬

赫灼と照付る日光に、瓦は紅蓮の焰を吐き、大地は熱け爛れ、人は油で沸られる思ひ。……坂の眞向ふの雲の峯までか、黄ろく、銅色に見える大灼熱の眞晝時。

私は龍岡町の我家に歸らうと、額の汗を拭き、本郷の四角を切通坂の方に向つて歩いて來た。麟祥院の前を越し、金物屋の小路を曲らうとして、ふと見ると、東隣の西洋菓子屋の店前は大道を埋める程の人集りである。白地の山、洋傘の波、そして各々昂奮した……寧そ悦に入つた色を顔に浮べて、一心

に何か見物してゐる。

私は思はず胸を躍らせ、立停つて群衆の後から覗いてみた。それは想像した如き喧嘩でもなく、行路病人でもなかつたが、……米俵を山と積むだる荷車を曳いた一疋の馬が酷暑の爲に行倒れになつてゐるのであつた。

『こんな瘦馬に、此荷はまた如何だい……剛愎張め、態ア見やがれ！』と職人体の男が痛罵したが、成程瘦馬だ。——九歳の牝馬で、脾腹も背中也骨が刺々し。毛並の悪い事つたら類がない……緒赤けた蓬々した、泥塗れの雑草のやうに穢い毛で、所々に灰色の毛が交つたのが如何にも爺穢い。それに脚は驢馬と間違ふ程纖細く、頸は短く、小さい顔は重い石にでも壓迫されたやうに妙に曲んで、皺だらけで、蒼白く寂れた眼ばかり洞然と大きい。——何の事はない、枯

草の湿々と腐蝕つた麻の隅に、生れ落ちるから以來、日の目も見ずに蹲つてゐたといふ体裁。

此馬を竹の鞭で絶時なしに引叩いてゐる一人の馬方がある。かれこれ六十四五に垂らうとする年輩で、先づ瘦馬の相手としては好適いのよほく老爺。——萎びた腕、蹣跚く脚、出張つた頬骨、白髪になつた短い鬚、——壯年の血氣と慄悍の勢ひとは、とくの昔に體を抜け去つて、今は秋風の古い麥藁帽を被り、ジャケツト形の毛の散々に擦切れた上衣を着、半股引に厚皮の兵隊靴を穿いた所は、漂泊好きの露西亞の賤民その儘の風体で、紅く染つた毛むくぢやらの胸、血管の太つた、日光に晒された顔、窪むで血走つた眼などは、一見飲酒に感溺して居る事を示す。

私は此の光景を一眼見ると、忙しい身も忘れて何時しか野次馬の群に入つて了つた。野次馬に違ひない——人の不幸を悦ぶのだから——。

さて、老爺は根氣よく馬の尻の邊を亂打してゐる。日に燻けた顔は赫と焦込むだ勢ひに一段と眞紅になり、眼も爛々と光れば青筋も蚯蚓のやうに張上り、宛で亡者を苛責する赤鬼のやうである。けれども馬は……烈日の炎の下、砂塵渦巻く巷の中、こゝに幾年の苦役、困憊、負擔を永遠に脱れよと、不思議なる運命に指示された如く、四足を中に折り込むで地上に長まつたまふ、首を拱門形に伸ばして顔を砂に摺付け昏濁した眼を半ば開き、脾腹に大波をうたせて、塊然として横はつて居る。

「こん畜生、戯けた眞似をしやがつて、……眞實に、こん畜生！ これでもか、

これでもか」

と老爺の狂暴の鞭は、白雨の烈しく大地を撲つが如く、馬の皮膚を見るく劈いた。

私は顔を背けずには居られなかつた。

すると私の對側から一人の若い男が現れた。散刈り頭の色の黒い、筋骨逞しい大兵の男で、シャツ一枚に白の股引を穿いてゐる牛乳配達らしい。

「オイ、馬方さん、那樣酷いことア止しねえな。」と兩肘を張つて腰にあて、「此馬アまじか具合が悪いんぢやねえかエ？」

「なアに、何處も悪くはねエ……横着なんさ、糞忌々しい……」と老爺は黧枯聲で吐出すやうにいふ。

「さうか、其にしても弱つてゐるから酷いや」と若い男は少し考へ「まア突支棒
でやつてみるだね……手傳はうか。」

「有難え！ 頼むぜ、若い衆！」

と湍まれて、小工面らしい顔をし、彼は四邊を見廻してゐたが、衝と群衆を
押し分け金物屋の店へ入つて行つた。(春影、艶馬)

【評】 猛夏の市中によく見るところであるが、如何にもよく書かれて居る。
酷ごたらしい馬子が、瘦馬を虐使して居る様、讀者をして涙をながさし
む。

名 花

庭前の菊花の頸、秋雨に打たれて惱める憐れさ！

壁間掲げあるは、匂ふ西の名花、女刺客シャーロット、コルデーの美しい肖
像である。

秋の哀れは畫にしみぐくと、石牢の裡に顔が青白う悲しく見える。

吁、コルデー、鷲ペンを持つて居る右手は、佛國三日天下の兇漢マラーを短
剣に刺した手か。薄紅櫻色の頬を冷たい鍵格子にあて、死刑前に何を懐へる。

長き雪髪に被る白き嶽帽白の牢服の崇高さ、昨日雪なす肌を敵の血潮を浴びた
事も偲ばれる。

愛らしい其の眼は、革命後の百萬の民が塗炭と血に疾苦を見兼ねて、袖に涙を拂つて、怪物マラーの家へ向つたのであらう。

美なるコルデー、全身の熱情は鐵格子から、我が頭髮に濡らすを感ずる。目と目と接して恥羞を覺える。今日活ける女を視た。(花外、美人像)

【評】 好散文詩。

雨と雲

駱駝あり、東の國より歸り來りぬ。沙漠に住める駱駝之れを迎へて、其群團に入れ、東方の奇事を問ふ。歸り來し駱駝答へて曰く、

「東の國は草木茂り、人多く住み、此地の如く淋しからず、且つ不思議なるは

雨といふものあり。」

「雨とは如何なるものぞ。」

「雨とは天より落つる水なり、此水の落つるに先つて雲といふもの現はる。」

「雲とは如何なるものぞ。」

「あゝ雲か、雲か、口にて言ひ表はし難きものを雲といふ。」

群團の駱駝、起つあり、伏るあり、一齊に曰ふ。是非其雲なる者、雨なる者を見たし、之を我等の神に祈らんと。(獨歩、沙漠の雨)

【評】 散文詩の上乗なるもの、愛誦禁することが出来ぬ。

曠野

師走の第二日曜日である。

朝より晴れ渡つた冬の空は正午すこし廻ると風——この平原の冬の都に多く見るところの空ツ風は砥の如き大路を舐め盡して更に行人が吾妻コートの裳や半外套の袖を翻つては電車に追ひ込める。

六日間のノートとインキ壺を携つ可き自分は日曜日の懐手を其儘、早稻田の學校を出でて下町の——新富町の友を訪問ふた。劇務に在る友は今日の安息日をも奪はれて、六日間働いた簿記臺上のローラーを今日も轉がし續けて居るのだ。御留守居の妹君が酌んで呉れた濃い茶に酔ふて飄乎と友の寓居を出た。

丁度「青山行」の電車が西風に追はれながら走つて来た、其車へ乗る。青山にも同じ趣味の友がある新富町友嗜好上の兄とすれば青山友弟である。此友も留守なので老たる友の母と匂ひスミレが一輪咲いたといふ福音や、カーネーションの挿木が着きさうだといふ罪なきブクイドを伺つて、やがて辭し去る。

今は最う風も風ぎた。

四時半？ かれこれ五時近くだらう。暮れ易い冬の日の薄ら寒さが痛いやうに肩を壓する、行人も稀である。

電車を待つべき自分は歩を轉じて北町を横断つて青山の練兵場へと抜けた。土一升と金一升といづれが貴きやといふ事は已に江戸時代からの宿題であ

る。翠微を縁日植木に求め得てそれを僅に賣上臺や軒々のはさまに培えるこの都に、此都の西に這磨ひろ野があらふと誰が信じやう。野の廣廢は？嘗て此處に練兵せる一軍曹を執へて尋た時東南何米突。南北何米突。何個聯隊までの練兵に適するとか言ふたが皆忘れて仕舞つた兎に角唯廣いく曠野といふて置かう。

自分が三四年前澁谷の山莊に居つた時分霧の深いく夜をこの野の中に立つて全く方角を失つた事がある。自分を訪問して呉れた友がこの野中の深雪に行き悩んで再び歸へり來つた事がある。月の良き夜友と空想に耽つてこの野に咲き亂るゝ月見草を観に來た事がある。更にこの野に就いて神秘的な譚が青山邊の古き人々によつて傳へられる——丁度露西亞小説の一頁を見るやうな——夫、

れは十二三年前の事である春は月朧なる毎夜く野の東隅御所の西に當る邊り、燃ゆるが如き朱の袴を摺袴せる上臈と若き近衛士官とが喃々私語つゝあるを観た多くの人がある。其女性はこの野に住める狐狸であるといひ其若人こそは化性のものであると云ふ説は未だに確かでない。自分
自分は過去を談るに興して眼前に展開するこの曠野の光景を談るを忘れた。

(无音、野の落日)

【評】 觀察極めて妙。

聲

夕映が、落葉した林の彼方の空を赤く、燃えるやうな色に染めて居る。

林の枝が黒く、かつきりとその夕映の空に映つて居る。林の上から燃える空の色が次第に薄らいで、碧い空に黒すんだ黄昏の色が流れて居る。大きな聲が野を叫んで通つた跡のやうに、しんと静まつて居る。あゝ、日は今日も落ちた。

私は森の端れに立つて、空を見て居た。すると、遠い空から細い、たどくしい萎びた調子で唱ふ歌の聲が起つて、光るやうな細かい波動に乗つて……ひたくと胸にうら悲しい、薄暗い心持を囁く。

悲しい聲の歌が——何處の誰が歌つて居るとも知れぬ、悲しい萎びた聲の歌が、遠い空のはてから、泌々と人間の胸に囁く。そして人間は生涯しらぬ漂泊の旅に心がさまよひ出す。……(葉舟、小品五篇)

の(一)

【評】 チク／＼と神経を刺すやうな文章である。作者の感興がスツクリあらはれて居る。

納涼

瀧を横に見下す離れた茶亭に、三人連の男が陣取つて居る。中で年嵩の一人だけは、中形の浴衣に縮緬の兵児帯を巻付けて居るが、他の二人は盲縞の筒袖に細い白の股引を穿いて居る。皆角刈頭で身が締つて、顔の赤銅色をして居る處を見ると、日頃労働して居る人らしい。既に爛徳利が七八本市松の薄縁の上に並立して、鮎の大皿は笹ばかり残つて、今は枝豆を肴に酒を飲で居る。

四時頃から急に被つた夕立は、もう霽れ掛けた。二度深く逃込むだ鯉の又た浮び出た濁水の池を隔て、高い松林が日頃より近く鮮に見える、其松の間に蒼空が寛やかに開き初めて、蟬が遠くで鳴出した。瀧は前より響が激しく成つたやうである。

東北西の三方から、此十二社の池を圍んで張出した茶亭に、雨迄は一杯に居た涼み客が、土砂降の最中何時奈何して還つたものか、繁吹を避けた幕や葭簀を揚けた處を見ると、半分以上退散して居た。

『雨も最早歇むだやうだぜ。』と二十七八の小男は額に傷痕のある顔を、新しい手拭で拭いて、『あゝ好い心地に成つた、兄貴、歌でも諺つて騒がうちやねえか。』

『諺ひねえな勝手に。』と浴衣は輪廓の太い顔に嬌々と笑を湛へて、『遠慮は入るもんか、遣んねえく。三味線でも呼ばう。』と吸餘の巻煙草を雨滴落へ投る。『呼んで上げましたやうか。』通り掛つた銀杏返の顔色の悪い婢が、端折つた尻を卸して、嗶聲で言掛お世辭笑をして寄つて來た。

『姉さん成るたけ仲で別嬪を呼んでおくんなせい。』

『えゝ莫大した別嬪さんを連れて來ますよ。』と駈出して行く。(鳥徑、池の木

靈)

【評】 夏の遊興場の寫生、輕妙なる筆、敬服。

犬

部屋の中の二人、私の犬と私と……外には物凄しい嵐が吠えて居る。犬は私の前に座つて、ジツと真向に私の顔を見つめて居る。

して、私は又彼の顔を見つめる。

彼は私に何事かを語りたさうに見える。彼が口がきけぬ。言葉がない。自分に自分が分らない——が、私にはよく分る。

分つた。此の刹那彼の心と私の心とは同じ情が動いて居るのだ。私達の間には何の違もないのだ。私達は同じなのだ。彼の中にも私の中にも同じビリ々々する火花が燃えかゞやいて居るのだ。

死はその冷たい広い翼を一度翻へして掃ひ去らんか……それが最後だ。

その期に及んで誰か私達の胸に燃えて居た火花の如何なるものであつたかを見定め得るものぞ。

然り、互に見かはした刹那の私達は獣でもなく人でもない……

平等の眼——その平等の眼が互に見かはした眼である。

彼と私と、獣と人と、その何れにも同じ生が怖れ慄きつゝ相融れ、相混じて

居るのだ。(御風、散文詩)

【評】 妙文、妙文。

春の愁

春は、將に暮れゆかんとするのである。

私は、爛熟した春に入ると、いつでも堪へ難く倦怠と眩惑とを感ずるのである。斯うした時、幽静な田舎の浴場にでも至つて、透明な色をした湯を浴び乍ら、一日、長々と横はつて、深い黙想に耽りたいのである。けれども事情が、それをゆるささない。ダルい倦怠を制するために、強ひて冷かな意志に鞭たねばならぬので、一種の軽い鬱憂に陥ることがある。彼の爽かな緑に包まれた樹々も、色の褪せた晩櫻も、黄金色の花をつけた山吹も私には鬱憂の象徴と見ゆるのである。堪へ難き春の愁ひよ。(梅溪、平安朝の幻影)

【評】 軽い筆である、洗練された文である。

花

花は「咲きも残らず散りもはじめず」と詠まれた、その僅かひと日の眞盛りを、遷終の緘黙めくまでほの白く假睡んでゐた。月は舊曆十五日、更たけては、天心近く棄てられたけれど、有繋に春の空の隙に霞んで、二十歳を四つ五つこえた上臈の、紅閨の怨を想はせて、艶かしくもうるんでみえる。花の香を含んでか、とろりと黏つて、熟睡の「夜」の息づかひほどの、習々との風もない。——戀はなくとも、甘く、悩ましく、胸を締めつけられるやうな晩だつた。赤坂の仲の町から、あの、深山の様に樹をかぶつた、大藏大臣官舎の崖下の

三平坂をおりて鈍角に曲つたあたりへ出ようと云ふのだから、山王臺をぬけるのが、近さも近いが、花の頃、月の宵ゆるには、小々ならば廻りでもいよ。が、姉の友達をその永田町の陰気な窪地にあるうちまで送り届ける役目を云ひつかつて、眠むさも忘れて、大喜びで飛出して來た十六と十四になる兄弟では、道の遠い近いでなく、尙更夜櫻の風流でもない、日吉橋を渡つたところから、栗丸太で土止めをした裏道の、二枝に分れたのを頂上までの断ツこが樂みなからで……。

「ちツとー 勝たアい」

負シ氣の弟が、のめるやうに急な坂を駆けあがつて來たが、吃驚したやうにひよいと立ち止つて、「あ、綺麗だなア。……兄さん、早くこつちへ來てごら

んよ。

あがり切つた社の裏手のあたりは、まづ杉の大樹、檜、椎、松など、——なかに楓、榎の坊主も混るが、多くは黒々と枝を重ねた常盤木で、地息も急にひやつくほど空を覆ふて暗い彼方に、瓦斯燈の火影をうけて、——雪とは冴えない、もつとあたゝかく、そのあたゝかみに醸されて、粉でもふいたやうにほのくくと櫻はあたりを白ませてゐた。晝ならば、登つて折つて、すぐ飽きて捨てかねないやんちやながら、パノラマの隧道をぬけて、ちらりと油繪の空を見た瞬間のやうに狂喜の聲をあけたのだ。

中途までは断けあがつたが、兄は、なんだ子供ぢアあるまいし、馬鹿々々しい、と云つた氣持で、急に足をとめて、谷底のやうな下の道を振り返つた。前

には覺えのないことだが、そんな時、ふらりと目がまう。(淳、夜櫻)

【評】 子供の状を描きて精、模範的傑作として採る。

日光の奥

山では矢張り日光の奥だ。

栗山十三郷、鬼怒川の上流に沿つた大部落、それが今でも分明と頭腦に印象されてある。湯西川の綺麗な溪流の岸に湧き出づる温泉、毎日々々行つても行つても山ばかり林ばかりの深山窮谷、をりく見える溪流の閃めき——川俣の温泉場は其の溪流の細く細くなつた狭い谷の底にあつた。其處には沿舎が一軒あつて、關干から前の山の紅葉が鮮かに降り頻る雨の中に見えた。蒲團の襟に

は垢がついて冷たかつた。階段を下りて下に来ると、其處には圍爐裏があつて、野門から浴期中だけ上つて来て居るかみさんが、櫓をくべて無駄話を續けてゐる。禿頭の爺は、狂歌をよむのが得意で、よく戯談を言つて人を笑はせたが、ある時興に乗つて、猪狩の話や鹿狩の話や、山小屋の話なぞをした。維新の亂に會津の兵に驅逐されて、同市まで出かけて行つて其處で一戦争して、怖くなつて山越しに遁けて歸つた時の話もして聞かせた。傍に此の温泉場に二軒しか無い樵夫の家の若い細君が坐つて居て、私などと一緒に其話を聞いたり、いろ／＼な話をしたりしてゐた。

此の細君は年の頃二十位で、眉を剃り齒を染めて居たが色の白い輪廓の正しい眼附の好い女で、こんな深山にかうした美人がゐるかと思はれた。それに言

葉が鄙びてゐなかつた。聞くと、此の春、山向の南會津の檜枝岐から嫁して來たのださうで、駄馬に乗つて、丈に餘る雜草を分けて、路のない山路を越えて遣つて來たといふ。私は萬葉時代のことを考へずには居られなかつた。(花袋、日光の奥)

【評】 紀行文でも、一種趣の變つた面白い書き方である。

武藏野

昔の武藏野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。即ち木は重に櫛の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え

出づる、其の變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、様々の光景を呈する、其の妙は一寸西國地方又東北の者には解り兼ねる。

櫛の類だから黄葉する、黄葉するから落葉する。時雨が私語、風が叫ぶ一陣の風小高い丘を襲へば幾千萬の木の高く大空に舞つて、小鳥の群の如く遠く飛び去る、木の葉落ち盡せば、數十里の区域に亘る林が、一時に裸體になつて蒼すんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄み渡る、遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の日記に「林の奥に坐して、回顧し、傾聴し、涕視し、默想す」と書いた、ツルゲーネフにも「坐して回顧し、而して耳を傾けた」とある。此の耳を傾けて聞くといふこ

とが、そんなに秋の末から冬にかけての今の武蔵野の心に適つて居るだらう。秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林のかなたに遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲、風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲、叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音、空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横切る響、蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵練習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話し乍ら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠ざかり行く、獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音、遠く響く砲聲、隣りの村でだしぬけに起る銃聲。

時雨の時に至つては、これほど幽寂なものはない、山家の時雨は我が國でも、和歌の題にまでなつてゐるが、廣い野末から野末へと林を越え、杜を越え、田

を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通りすぎ時雨の音の如何にも幽かたで又鷹揚な趣があつて優しく懐かしいのは、實に武蔵野の時雨の特色であらう、自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。これは又人跡絶無の大深林であるから、その趣は更らに深い、その代り武蔵野の時雨の更らに人なづかしく私語くが如き趣はない。(獨歩、山水紀行)

【評】 武蔵野の面影の偲ばれ、然も詩趣に富むの妙文。

夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるや、の音聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと、琴は西片町

あたりの垣根ごしに聞たるが、いと良い月に弾く人のかけも見まほしく、物がたりめきて床しかりし、親しき友に別れたる頃の月いとなくさめがたうも有るかな、千里のほかまでと思ひやるに添ひても行れぬ物なれば唯うらやましくてこれを假に鏡となしたらば人のかけも映るべくやなど果敢なき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかけ物いふやうにて手すりめきたる所に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、此の池の深さいくばいとも量られぬ心地になりて月は其のその底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかげと孰れを誠のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さど波すこし分れて是れにぞ月のかけ漂ひぬ。斯

くはかなき事して見せつれば甥なる子の小さきが真似て、姉さまのする事我れも爲んとて硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れもお月さま砕くのなりとてはたと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに果敢なき事にて失ひつる罪得がましき事とおもふ。此池かへさせてなき言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に歸りて餘波もとどめぬを、硯はいかさまになりぬらん。夜なく影や待てるらんと哀なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなきある人の心安けに訪ひ寄りたる、男にても嬉しきをまして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん。みづから出るに難からば文にてもおくせかし、歌よみがましきは憎くき者なれど斯る夜の一言には身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占りのこゝろ、汽車の笛の遠くひ

湯槽

どきたるも何とはなしに魂あくがるゝ心地す。(一葉)

【評】 妙文、然もやさしき書き振り、他の模倣を許さざる獨特の筆である。

余、湯槽の縁に仰向けの頭を支へて、透きとほる湯の中の軽きからだを出來るだけ抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふわり、ふわりと魂がくらのやうに浮いてゐる。世の中もこんな氣になれば樂なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはづす。どうともせよと、湯泉の中で、温泉と同化してしまふ。流れるもの程生きると苦は入らぬ。流れるものゝなきに魂まで流して居れば、基督の御弟子となつたより有難い。成程此の調子で考へると、土左衛門

は風流である。

ス井ンバーンの何とか云ふ詩に、女が水の底で往來して嬉しがつて居る感じを書いてあつたと思ふ。余は平生から苦にして居た、ミレーのオフエリヤもかう觀察すると大分美しくなる、何であんな不愉快な所を擇らんだものと今迄不審に思つて居たが、あれは矢張り晝になるのだ、水に浮かんだまゝ、或は水に沈んだり浮かんだりした儘、只だそのまゝで苦なしに流れる様は美的に相違ない。夫れで兩岸に色々な草花をあしらつて、水の色と流れて行く人の顔の色と衣服の色に、落ちついた調和を取つたなら、屹度晝になるに相違ない。然し流れて行く人の表情が、丸で平和では殆んど神話が比喩になつてしまふ。痙攣的な苦悶は固より、全幅の精神を打ち壊すが、全然色氣のない平氣な話では人情

が寫らない。どんな顔をかいたら成功するだらう。ミレーのオフエリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一ツ風流な土左衛門を書いて見たい。然し思ふやうな顔はさう容易く心に浮んで来さうにもない。

湯の中に浮いたまゝ、今度は土左衛門の贊を作つて見る。

雨が降つたら濡れるだろ、

霜が下りたら冷めたかろ、

土の下では暗からう。

浮かば波の上、

沈まば波の底、

春の水なら苦はなかる。

と、口のうちに小聲に誦しつゝ漫然と浮いてゐると、何處かで引く三味線の音が聞える。美術家だのと言はれると恐縮するが、實の所余が此の樂器に於ける智識は頗る怪しいもので、二が上がりうが、三が下がりうが、耳には餘り影響を受けた例がない。しかし、靜かな春の夜に、雨さへ興が添へる山里の湯槽の中で魂まで春の温泉に浮かしながら、遠くの三味を無責任に聞くのは甚だ嬉しい。遠いから、何にを唄つて、何を弾いてゐるか無論わからない。そこに何だか趣きがある。音色の落ち付いてゐる處から察すると、上方の檢校さんの地唄にでも聽かれさうな太棹かとも思ふ。(漱石、山水紀行)

【評】實に面白い觀察である。湯槽の縁に仰向けになつて、心ゆくばかりの

んびりとひたりながら、土左衛門を想像して見るとは、全く餘人の出来な
い觀察である。

水に浮かんだり沈んだりして春の流れを静かに流れて行く土左衛門は、風
流である。作者の云ふ如く、春の水ならば苦はなからうとは、これを讀ん
だ余も同感である。

夏も面白くない、秋も面白くない、冬も面白くない、春なら一番よい。

大抵土左衛門と云へば、夏がふさわしいやうに思ふが、それは月並だ。何
と云つても春がいゝ。

春の水なら苦はなかる。と来て、初めて作者の月並ならぬ、風流の土左衛
門が生れて来る譯である。

千代さ鳴いた

其の頃は日課として小説を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は大抵机に
向つて筆を握つて居た。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出
來た。伽藍の様な書齋へは誰も這入つて來ない習慣であつた。筆の音に淋しさ
と云ふ意味を感じた朝も晝も晩もあつた。然し時々は此の筆の音がびたりと已
む、又已めねばならぬ時も大分あつた。其の時は指の股に筆を挟んだ儘手の平
へ顎を一應撮んで見る。夫れでも筆と紙が一所にならない時は撮んだ顎を二本
の指で伸して見る、すると椽側で文鳥が千代々々と二聲鳴いた。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘留り木の上から

のめりさうに白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたら嘸喜ぶだらうと思ふ程な美しい聲で千代と云つた。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、と受合つて歸つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度堅横に向け直した、やがて一團の白い體がほいと留り木の上を抜け出した、と思ふと奇麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺な釣鐘の様に静かである。流石に文鳥は軽いものだ、何んだか浮雲の精の様な気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。奇麗に平にして入れてあつた粟が、はらくと籠の底に濡れた。文鳥は嘴を上げた咽

喉の所で微な音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微な音がする。其音が面白い。静かに聽いて居ると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。董程な小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつゞけ様敲いて居る様な気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅の様である。其の紅が次第に流れて、粟をつゞく口尖の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い、左右に振り時く粟の珠も非常に軽さうだ。文鳥は身を逆さまにしない許りに尖つた嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨らんだ首を惜気もなく左右へ振る、籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺丈は寂然として静かである。重いものである。餌壺の直徑は一寸五分程だと思ふ。

自分はそのつと書齋へ歸つて淋しくペンを紙の上に走らしてゐた。縁側では文鳥がちりと鳴く。折々は千代々と鳴く、外では木枯が吹いてゐた。夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を臺の縁へ懸けて小さい口に受けた一掬を大事さうに、仰向いて呑み下してゐる。此の分では一杯の水が十日位續くだらうと思つて又書齋へ歸つた。晩には箱へ仕舞つて遣つた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降つて居た。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明る日も亦氣の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやつたのは、矢つ張り八時過ぎであつた。箱の中ではとうから目が覺めて居たんだらう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否やいきなり眼

をしばたゝいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔し美しい女を知つて居た。此の女が机に凭れて何か考へてゐる所を、後から、そつと行つて、紫の帶上の房になつた先を長く垂らして、首筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものう氣に後を向いた。其の時女の眉は心持八の字に寄つて居た。夫れで眼尻と口元には笑が萌して居た。同時に恰好の好い頸を肩まですくめて居た。文鳥が自分を見た時、自分は不圖此の女の事を思ひ出した。此の女は今嫁に行つた。自分が紫の帶上でいたづらをしたのは縁談の極つた二三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入つてゐる。然し殻も大分混つてゐた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁つてゐた。易へて遣らなければならぬ。又

大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにも拘らず、文鳥は白い翼を亂して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥に濟まないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯が何處かへ持つて行つた。水も易へてやつた。水道の水だから大變冷たい。

其の日は一日淋しいベンの音を聞いて暮した。其の間には折々千代々々と云ふ聲も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考へた。然し縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を彼方へ飛んだり此方へ飛んだり、絶間なく行きてつしてゐる。少しも不平らしい様子はなかつた。(漱石、文鳥)

【評】 軽い俳味のある妙筆、眞に模範とするに足るの傑作である。

男の中の男

正徳のすへ享保の頃、又もや唐犬額に板倉屋源七が餘波りの障子髪かき上げて銀の針線を元線とし、身の拵へ衣裳の作りは小唄に残る深見十左を其まゝ繩鼻緒の駒下駄に江戸の八百八町を踏み鳴らし、男の中の男と立てられし治郎吉といふ六法むきの臂突あり、辱めを受ければ飛ぶ鳥おとす大名の行列を遮りて數百の武士を敵手に腕を叩き、義に感ずれば非人乞食に膝を屈めて三尺の小兒にも禮を缺かず。十四歳の頃日本橋にて一人の武士と物いひ争ひざま、雨あがりの泥脛をあけて蹴付けしかば、武士は髪逆立つばかりに憤りて治郎吉が腕首を捉へ、無残にも其兩手を欄干の上に重ねおき刀の小柄抜き取りて田樂刺し

にズバと打付けたり。性來無双の不敵者なれど、未だ十五に足らぬ身の何とて堪るべき、みるくうち顔の色青く唇も紫を帯びて黒血まかれてポトリボトリと川へ滴るを武士はあざ笑ひつゝ「小童奴、痛むか、其の代り小柄は汝に呉れる」と其のまゝ五六歩行き過ぎんとせし後より治郎吉聲をかけて「待つて、お武家、いよく此の小柄呉れるか」意外の一言に流石の武士も荒膽ひじかれ、立ちかへりはしたれども呆れて答へなし、治郎吉は血走る眼を上けてジロリと武士の顔を睨み「有難う御座います」といふや否や必死の力を込めてエイトばかりに双手を引けば、ベリく音して紙を裂く如く、縫はれし縁は離れて己のが手に戻れど、小柄は尙ほ依然として血糊のまゝ橋の欄干に残れり、山なす群集は懐みに打たれて言句なく、武士は草履脱ぎ捨てて一目散に逃げ出

すを見るより、掌の眞只中から指の股に掛けて割切つたるまゝの手に小柄を握取り「サンピン待つた禮をいふ」と叫びつゝ跡を追ひし治郎吉の振舞ひ、あはれ此の魂ひ身丈と共に延ばさば如何なる者となりやせん。(浪六、三日月)

【評】 男の中の男、三日月治郎吉の面目を描きて紙面に躍如たる書き振りに、此の作者ならではの、斯うまでは書き得ない、然も此の場面、作者の筆と合致し、キビくしたる筆、眞に妙文として愛誦措く能はずである。

實 相

淳吉は、久し振で歸着した。妻と一人子供とを一緒に連れて行つた。旅行に出る前に、彼は身に付けて行く着物と一二枚の衣更への外の衣類は、

スツカリ質に入れた。妻にもさうさせた。何も旅費の融通にするなど云ふ譯ではなく、留守中の火難や盗難を怖れたからであつた。たゞ一人留守をさせる女中は、心からの正直者で、その點では信用が置けなかつた。目ほしい者さへ質に入れて置けば、火事が行らうが泥棒が入らうが、平氣だと思つた。

淳吉は、衣類と云つても、絹物は五六枚しか持つて居ないので、それに洋服類を併せても、品数は幾らもなかつた。妻は、それでも一通のものは持つて居た。彼女は、箆笥の抽斗しから着物を次ぎく出しながら、

『まあ！質に入れると云ふことを、お母様が聞いたなら、眼を丸くしようわい！』など云ひながら、それでも餘り嫌がつては居なかつた。田舎の士族の一寸した家柄に育つた彼女は、質に入れたりすることを、可なり悪事だと思つて居たの

だが、淳吉には、さうした心持は、殆ど残つて居なかつた。學校時代には、着て居た蒲團まで、質屋へ擔いで行つたことなどがあつたから。それでも、晝日中質屋の手代が、入つて来た時は、そんなにいい心持はしなかつた。おまけに、戸外に立つて居た隣のおかみさんが、——それは手代と顔馴染だつたと見え——如何にも、大事件でも起つたやうに、追ひ纏るやうに、

『何處！何處』と手代に訊いたのを、硝子戸越しに見た妻は、一寸愴氣たやうだつたが、『なに、かまやせん！お金に困まつて入れて居るのぢやないんぢやけに』と彼女は一寸反抗的に云つた居た。

手代は、着物の柄や地質などを、時々お愛憎に賞めながら、品物を數へてしまふと、

「えー！何幾お貸しいたしませうか。お入用の金高を仰つて下さいませんか」と、云つた。

「なに別に金が入ると云ふ譯ぢやないんだ。家内も一所に旅行をするもんだから、用心のために預けて置かうと云ふんたから、金高には望がないんだ。」

さう云ひながらも淳吉は、本當に金に困つて質に入れる人も、やつぱりこんな躰裁のよい事を云ふのではないかと思ふと、此方の云つて居ることも、向うへは躰のよい云ひ譯に聞えやしないかと思つて、一寸不愉快だつた。

「手前共では、幾何でもおよろしいのでムいしますが……」と、先方は淳吉の切り出すのを待つて居た。

「一體幾何まで貸さうと云ふのだ」淳吉は、一寸自分達夫婦の着物が、本當は

何幾位の値段があるものかと、好奇心で訊いて見た。

「へえ！四百五十圓までお貸し致しませう。これで新しくおこしらへになれば千圓以上もかゝりますでせうが」と、餘り澤山借り過ぎて、十圓近くの利息を佛つても馬鹿らしかつた。それかと云つて、代價と丸切り掛けはなれた少額の金を借りるのも、何となく不安だつた。それで、彼は利息が丁度五圓位で止まるやうにと、三百圓だけ借りることにした。

手代は、男物と女物とを別々に、大風呂敷に包んでしまふと、連れて来て居た小僧に小さい方を負はし、自分は大きい方を背負ひながら、

「へえ！ 歸る時には、北の方を廻つて歸りませうか。隣のおがみさんが、うるさうムいますから。」

と云つた。

淳吉は、自分は少しも耻しくない事をして居るのに、手代までが、此方を何か後暗いことでもして居るやうに、庇ばうとするのが、不愉快だつた。

「なにー そんな事平氣だよ。堂々と歸つて呉れてもいゝよ」と、云つた。

が手代は小僧を指圖して、やつぱり北の方を廻つて歸つて行つた。が、淳吉にもその方が氣持がよかつた。(寛、盜者被盜者)

【評】 浮世の裏の實相、よく描かれた。

暗い秋

「早く冬が来ればいゝになあ。」

そんな事を思ひながら道を通つてゐた。曇つた空で、風も冷たい。冬の事を思つて行くと、今にもその空から雪が降つて来るやうな氣がした。雪が降れば好いになあわ。けの解らない、斯様な寂しい秋の夕方なんか嫌になつた。何方を見ても只灰色に曇つてゐる空ばかりぢやないか。——眞白く地上に敷いた雪の上を、碧紺に澄み切つた空から日光が直射して、黒い山が其空に向つて嚴めしく衝立つてゐる山國の冬のさまが見えて来る。總てのけじめが際やかだ、冬は勇ましい、山國の冬は誠に雄々しい。其山と空と、一望曠い雪の原の上を、ちかく日に照らされながら、通つて行く自分の姿が見えるやうだ。

「早く冬が来ればいゝになあ。」薄曇りの嫌やな秋の色は何處にもまつはりついてゐる。家の中も薄暗い、友人の顔を見ても薄暗い、町を通つて行つても薄暗

い。自分の行く處が皆な薄暗くなつて了ふのか知ら。斯様な薄暗い中を早くかけ抜けやうと、目を閉ぢて走つて行つて見たが、やはり駄目だ、忙はしく働いてゐたら其影も消えて了ふだらうと思つても、やはり駄目だ、少し暇さへあれば四圍は直ぐ薄暗らくなつて了ふ。こんな薄暗い雲が落ちて了ひ、雪が降つたらばいゝだらう。「早く冬が来ればいゝな」また同じ事を繰り返しながら歩いて行つた。(孤雁、冬)

【評】 秋の夕方に、冬の事を思ひながら、秋の薄暗いのを嫌つてた、作者の感想だ。一寸氣の利いた文章である。

急場

それから私はどうしたか？

全く話にならない話なのだつた、——月末までにもう五日以上と日がないので、下宿屋の出入口の横手には、一面に硝子障子を嵌めた主人たちのゐる帳場部屋があつて、それはまだ私のヒステリーのをんながるた時分、彼女の機嫌を取るために彼女を笑はせようと思つて、私がそれを水族館見たいだと言つたことがあるところのものだ、そこには小柄な男の主人がいつも變らず魚のこち見たいな顔をして坐つてゐるし、大女の上さんはまったく比良目そつくりな恰好をしてその傍にゐるのだ、さう言つたら、その時何かの事で丁度ヒステリ

イを起しかけてゐた私の厄介者のをんなは途轍もなく可笑しがつて、お蔭でやつと機嫌を取止めたことであつた。だが、今はもうそのをんなをもうまく欺し別れてしまつて、一難は辛うじて去つたことだが、その代りもうその帳場部屋が可笑しな木族館に見えるどころか、夜、わざと私が十二時近くに外からのそくくと歸つて行くと、その水族館めいた部屋の中では、こちの主人が長々とお輕のやうな手紙を書いてゐるのである、それが何！の手紙ではなくて、その中には洩れなく私もまじつてゐるところの、それは下宿人三十幾人かの月の勘定なのである、私は気が氣ではないのだ、だが、溜息するより外に私は仕方を知らないのだつた、何といふこの世の苦勞の隙間のなさだ！早い話が、ヒステリイのをんなが逃れたら、その翌日同じヒステリイのをんなが逃げ戻つて来た、

彼女を漸くなだめて送り込んで歸つて来たなら、髯の三百代言が待つてゐたことだ、彼を漸くなだめて、五十圓の金を月賦で拂ふことに勘辯してもらう手紙を昨夜したためて、ほつとしたところへ今度は又下宿屋の勘定書た、そして肝心の私がかからしみの無収入の境遇と來てゐるのだ、まったく難儀は、錦畫にある楠正成の湊川戦死の場に飛んで來る矢の數よりも隙間なく降り掛つて來るものと見える、おまけにそれ等の矢を薙ぎ拂ふ刀一本、私と來たら持たない次第なのだ。

こんな風と言ふと大層呑氣なやうに聞えるかも知れぬが、さうして！腹の中は仲々そんなものではなかつたことだ。元來、私はさう威張る性質ではなく、寧ろ大人しい側の人間なんだから、一人や二人ぐらゐ、目下斯う斯ういふ風に

難儀なんぎをしてるますから、何がよい勤めつとめになり仕事しごとなりを周旋しゆせんして下さいませんか、と言いつて頼たのみに行く先輩せんぱいがあつても然しかるべきものなのだが、そんな人間にんげんを生憎あひにく一人も持ち合あはさないものだから、何なんとその急場きふばの凌しのぎようが付つかないのだつた。(浩二、迷へる魂)

【評】 收入しうにふの無い境遇きやうぐうには月末げつまつの下宿料げしゆくれうは、第一だいいちの難關なんかんである。此この窮境きうきやうを描かきて實じつを寫うつす、妙文めうぶん。

五 城

松楓しょうふう肅疎しゆそ、一區いくの淨地じやうちを護まもれる孔子廟邊こうしべんに歩趨ほすうして、微風ひふうに戦たたかう竹樹ちくじゆの音を絃誦げんそうの聲こゑと聞き做なしつゝ、徐じゆかに大成門だいせいもんを出いで、牆たふに隣となれる縣けんの物産陳列館ぶつさんちんれつくわん

に入り、巡覽じゆらんすること少時しほらくして更に西にしの方青葉城址ほうあはじやうしを指さして車を走はらす。

廣瀬川ひろせがはを渡わたれば、樓門らうもん高く翠阜すいふに倚よつて立つ、門もんは元豊太閤名護屋もとほうたいがなごやの牙營がえいのものなりしを藩祖はんそ正宗まさむねに賜たまひ、正宗まさむねこれを茲こゝに移うつして青葉あはの城しろの大手門おほてもんとせらるなりと傳つたふ。樺けやきの古柱ふるはしら、如輪目じゆりんもくの厚扉あつこびら、雨あめは彫ほり霜しもは刻きざみて木理ぼり凸起とつぎし、敲たたけば金石こんせきの響ひびきあり。梁はりに飾かざれる五三ごさんの桐きりと菊きくとの紋章もんしやうは、黄金わうこんの色いろに燦かがやき、屋上きよじやうの鷗尾おうび高たかく青冥せいめいに挿さす、氣象きしやう誠まことに廣大くわうだい、獨眠龍どくみんりゆうの雄圖ゆうずを觀みるべし。

第二師團長だいにしだんちやうの副官ふくくわん、懇勲こんこんに余等よらを司令部しれいぶの樓上らうじやうに延ひき、露臺ろだいの邊へんに立ちて四方はうの形勢けいせいを指示しじす、近ちかく萬葉まんやうの市衢しきを瞰み、遠とほく郊外かうがいの風煙ふうえんを見る、正まさに是これ奥羽おくう五十四郡ごじゆしよくわんの太守たいしゆの盛宅せいたくとするに足たる、着みて坐まろに膽いに毛けを生しやうずるを疑うたふなり。

時の迫れるをもつて愛を割いて司令部を出で、十時半、東北大學の始業式に列す、式場は校庭の中の大幄舎に在り、緑葉と彩花とを集めて門を作り簡素にして清楚なり、總長北條時敬氏の式辞、言々風霜を帯びて人の脾肝を刺すの概あり、其の結末の一句、最高學府たるの天職を廣うするの時んば國家は斷じて之れを宥さざるなりといふに至りて、舌頭燃えんとす。

式後余等一行は市中の名所を巡覽するものと、郊外の舊蹟を討尋するものと、の二隊に分れ、余等は自動車を驅りて先づ七北田村の洞雲寺を觀に行き、所謂山の寺なり、慶雲年間定惠和尚の創立するところ、山を蓮葉といひ寺を圓通と呼びたりしが、其後慈覺大師再興の始祖となり、更に久しく年所を歴て荒頽せしを、後小松帝の應永七年、梅國禪師來り領主國分氏の寄捨を得七堂伽藍を作

ると傳ふ。(麗水、青葉城)

【評】 獨眼龍將軍伊達政宗の居城眼前に展開するの思ひあるの妙文である。

眞情

十一月一日附の御手紙拜見した。お父さんもお母さんも達者の由何より結構。兄上は仕事の方は大變好成績だつて三十日に手紙を送つて呉れた。

赤坊は大きくなつたつてね。子供を産むと人間はすつかり變更つてしまふものだから面白い。姉さんからは林檎を送つていたといたからお前からも宜しく御禮を言つてお呉れ。

何度ちく言ふやうだけれども、家庭では理屈は大禁物だ！必要な時、理屈

を言ふ事さへ止める忍耐があれば大抵の事は治がつく。お前は少し理屈を言ひ過ぎやしないかと思ふよ。

上京の事だつて餘りせぐにいたらない。東京へ來ればすぐ立派な學校へ入つて立派な學者にでもなれると思つて居ると違ふ。

なぞと言へば花田さんだの山崎さんだのをひきあひに出すけれども、兄さんの目から見ればあの人達は牢屋へ入つて居るのだ。

新しい身空と新しい心を、古い頭を持つて居る老教育者の管の下へ屈めて居るのが學問なら、兄さんなんかこんなに貧乏してこんな商賣して居やしないんだ。國の兄さんと一所に林檎でも造つて金を儲けに懸らあね。

古い思想と其待主に戦ふ爲めに斯うしてゐるんだ。そして勝利がつつと遠くに

見えるから斯うしてゐるんだ。

兄さんは眞面目に言つてゐるんだよ。(雨雀、妹に)

【評】 兄より妹に送る手紙、眞情あふれ、軽い書き振り、眞に妙文である。

晩景

十一月も下旬——朝から空ツ風の吹荒る寒い日の晩景であつた。自分は頭から砂に埃を浴びて、山の手から下町へ、下町から山の手にと一日東京中を駆めぐつた。別的といつてはなかつたが、何處かで餌を拾はうと思つたからで。併し例に依つて何の得るところもなく、たゞ空念と困憊とを感じながら、郊外に近い或る邸町を歩いてゐた。神経はもう疲れきつて、歩いてゐるといふより

は、無意識にブラリ／＼動いてゐるに過ぎなかつた。両手をふところ、頭は重く垂れてゐた。

フト氣が付くと、唇が乾き盡つてゐる。で舌なめずりをすると、強か砂を喰つて口の中がザラ／＼する……何んとも謂はれぬ不快を感じて、吻ツと歎息する。息は白く黄昏の空氣に搔れる。

もう軒燈に火が入つて、淡い光が靜にボチリと見える。何時か風は落ちて了つてともすると冷たい風が裾を煽る……濃黒な樹の影も揺れる。何處かでバタンと物の倒れるやうな音が、沈靜した空氣に牙えて響く。自分は熱と耳を澄した。

乾ききつた路は尙だ明るい。(霜川、銀杏の森)

湯宿

【評】 晩秋と云ふよりももう冬の初めの町端れ屋敷町の黄昏の景を輕妙な筆で描かれて居る。

浴室に入つて急いで衣服を脱ぐ、湯槽からは白い湯氣が濛々と立つて居て、其湯氣のうちに洋燈の光がほんやりと温かに溶けて居る。餘り清潔な湯槽ではないが、頸まですつほり浸つて身動きもしないで居ると、それでも凍へた皮膚が暖もつて、いつとなく固くなつた感覺が弛んで来る。

中禪寺には今度で二度目で、しかも十四五年振りだと思ふと、何となく懐かしい。當時の霧の深かつた湖畔の感じが、眼の前に一ぱいになつて動いて居る

やうで、そしてその折には感ずることの出来なかつた幽かな調子を感じて居るやうな妙な心持になつた。

すると、雪が斑にかゝつて男体山の姿が蒸氣の中に浮ぶ……

倉滿ヶ淵を通り越して少し来た處で、車夫が——私を乗せて居る車が真先に行く——後の車夫に、

——おい、おい、見ねえ、御山は雪だぜ。

——道理で寒いや、たつた今降つたのだ。

こんなことを言ひ合つて居る。私は聞くともなしに聞いて居ると、

——旦那、旦那、御覽なさい、御山に雪が降りました。

——さうかと言つて、窮屈な母衣の中から身体を屈めて彼方を見ると、灰色

の雨雲の絶間から薄く曇つた雪が男体山の圓い峰をなだれて居る。そして雪の上を雲が靜かに動く、すべての色彩が陰氣で、くすんで居る中に、その新たに降つた雪の色だけが柔かき温かいやうに思はれた。(有明)

【評】 温栗宿に於けるスケッチ。

魔の淵

(上)

「苦しなくなつて？。」姉は妹に。

足許の小蟹の穴も見えぬ朧月夜、只一面に眞白の、銀の様な磯の砂地に、小さな足跡を四つとつ残して、今年の今宵も去年の通り、世に落ぶれた秋山の姉

妹が、漁師の住居のチラつく火影を、一步づゝ後に遠ざかり、恵比須の社に二つ三つ、風び交ふ螢の影も淋しき、浦磯傳ひに行くは何處。

衣裳こそは洗ひ酒しの飛白に、メリンス友禪のお太鼓なれ、花は盛り今年廿歳、肉つき豊かな色白の、眼元の涼しいスラリとした、土地の若者等が品評には、常に五本の指の一つを占めて居る姉の雪江は、いたはしや其病とは、誰が一目にも點頭かるゝ折ふし苦しげに咳き入る、肉落ちて此世の人の色艶なき、花はまだ漸う蒼の妹露子の顔のいぢらしげに見返りつ、

「もう少ししよ……矢張、來なきやよかつたわね、大變苦しうだわ、……少し休んで行きませう。」

「イーエ、大丈夫よ、姉さん、夫よりあのお月様御覽なさいナ、去年と同じ様

な色の雲に包まれて……。」

「左様ね……母様の……一昨年今夜は、シヨボくと雨の隆る晩だつたのね……。」

「妾共の來いゝ様に、母様がこんなお月夜になさるんでせうか？」

母様の語は、今更の様に胸を貫いて、言ひ合せた様に、握り合せた二人の手先は力が籠る。

斯くて暫時は無言の兩人。

磯を過ぎ、岩を攀ぢ、聽て漸う迎りしは、高う聳えし後の山の木間隠れに、小さな祠の燈明が、螢火のやうに微かに洩れて、神の御旨を囁いて居るかのように、瞬いて居るあたりを、ザーツと一しきり音たてゝは、遠くく扇ヶ濱邊の

松の梢に、物凄う響きを送り、聽て消え行く夜嵐の、襟元から浸渡るやうな物
淋しさと、見下す脚下は、此世からなる地獄もかくやとばかり、寄せては返す
大波の、何に激してかド、ドツと、當つて碎けて玉と散り、巖上の人を一呑に
せんす勢の凄まじさ、荒男子さへ晝尙、五分とは止まり得ぬ、茲南海の僻地の、
田邊の町の名所の一つ、土地の人は、天神崎の名を呼ばずして、只魔の淵との
み傳へ云ふ。兩人は今や、其巖上に立てるなり。

(下)

「おゝ凄しい、今日は格別荒い様ね。」

古びた繻珍緒の疊表と、紫天鷲絨の中太緒の、幅廣の雪駄とを、片手に提げ
た姉の身に、ピタリと寄り添ふた妹は、サツと浴びる濤の飛沫の冷たさと、謂

知らぬ恐ろしさとに身慄ひしながら、キと唇眞一文字に結んで、身動きもせず、
逆巻く波の面を見入て居る、姉の冷たい手を確乎と握り、夫でも尙懐かしげに、
凝と波の面を見詰めて居る。

時、不意に、

「アラ、露ちやん。」

低い聲音を慄はせながら、耳を澄して、何ものをか尙も聞き洩さじと、再び
口を結びし姉は、聽て忽ち聲を揚げて。

「……露ちやん、母様の……母様のお聲が。」

「エッ!。」

「微かに、微かに。」

又、ヒタと寄り添ふ姉妹。

潮を隔てし鉛山わたりには、二つ三つ見えし漁火も消え、凄い風の聲、恐ろしい濤の音、月さへ重なる雲間に隠れて、鬼氣肌に迫るやう、此時、何處ともなく。

「雪さーん……露ちやーん……。」

と、微かに、微かに呼ぶ聲す。

「それーね、母様が。」

「まあ、真誠に……。」

相抱いた兩人が視線はヒタト合ふて、

「姉さんー。」

「露ちやん……。」

「妾、もう此儘……姉妹で母様の許へ行きたいワ。」

「エッ！」

「寧ろ、この儔死んぢまいたいの。」

取紐つた手を放して、折からドツと、一際すぐれし大浪の、凄まじう碎けて歸ると共に沈んだ聲音に力を込め。

「……何うせ長生の出来る体じゃなし、生て居たつて、姉さんに御厄介ばかり掛けるんですもの、夫に、夫に、今度の姉さんの破談だつて、妾がこの病氣に成つたばかりで……夫を思ふと、もう……姉さん……どうぞ、後生だから、母様の許へ行つて頂戴！」

「まあ露ちやん、何を言ふんですよ。」

瀧なす涙を拭ひも敢ず、犇と妹を抱いた姉。

「何んな煩雑な事情があつたのか知らないけさ、自分さへ死ねば、小さい時からの、姉さんの許婚もあるんだし、妾達二人の身の上は、辰巳屋で引受けて呉れるからつて母様が……母様が……此海へ、此海へ……夫に……夫に……ね、姉さん。」

病み疲れた妹は、堪えて冷たい巖の上に泣き伏す。

「露ちやん！」

とばかり姉も共に。

「お父様の亡いのを好い事にして、我家の財産をメチャクにした揚句……母

様にまで、母様にまで、非業の御最後をさせ乍ら……今更、露ちやんの病氣を言ひ立てにして……思へばく、口、口惜しいッ。」

美しい齒をキリ、と嘔んで。暫時を口惜し涙に咽びし姉は聴て思ひ返すものゝ如く、物淋しい笑をさへ浮べて口を開き。

「けれども露ちやん、妾は、もうく決めて彼んな人非人を恨まない、結局斯うして捨てられてしまつた方が嬉しいんだから、ね、露ちやんも、もう其様な悲しい事を言はないで、早く快く成つて頂戴、ね、露ちやん。」

言へさ、深うも決せるものゝ如き顔色の妹は、涙ながらに頭を振つて、

「姉さんの仰しやること、よく解つてよ、けれども姉さん、妾、何うしてもく、もう此儘母様の許へ行きたいの、姉さんが厭なら妾一人でも……、母

様と同じ様に茲へく、下駄を並べて……それ、それ、又母様が呼んでいらつしやるじやありませんか、姉さん！」

早や死の神の黒き手に、その襟髪を掴まれしか、妹の眼の色はたゞならず、よろ／＼と立上つて姉の手をそのまゝ、恐ろしの淵近うタヂ／＼と進みつ、折から雲間を洩るゝ月の光りに、淺ましき我姿を見廻しながら。

「母様に吐られるかも知れないわね、姉さん、斯んな風姿をして……せめて、一枚の方でも着替えて来れば好かつたワね。」

言ひつゝ、ホ、と打笑む顔、今や死につかんとする人とは見えぬまで、樂しげに、輝く光明を認めたるが如し。

あゝ……と、微かに溜息を洩らせし姉。

「母様の三週忌に、同じ淵で……姉妹が……。」

夢更、死なんの思ひなかりし姉も、時と、處と、人にと誘はれ、世を捨小舟の幸無き身を、世に只一人の、肉の妹と相抱いて……。

悲の極、慘の極なる人の子の罪を、見んは憂しとや月は今、重なる雲の奥深ふ、再び臙の影を隠しつ。

一團と成つた姉妹の亡骸が、地引網にかゝりし時。

「狂人血筋は仕方が無い。」

と、只苦笑ひして、此近年、土地で分限の指を折られる、辰巳屋の慾張爺が引取りぬ。

「あの慾張爺は兎に角、長さんが、餘まり義理が濟まぬじや無いか。」
 と、可憐の二人が上に、同情の涙を注いだ人々が、異日同音の噂の主なる、凱
 旋軍人の辰巳屋の若主人長藏は、其後廓で明かさぬ夜は無いとや。 (幽月)

【評】

頗る達者な書き振り敬服々々。

藤 棚 茶 屋

三崎から浦賀へ向つて、三浦半島の脊髄の上を一里言來ると、往來を跨いだ
 大きな藤棚の影に一軒の休茶屋がある、見渡せば低く起伏する松山の松の梢
 の先に、藍を溶した海が、對岸を走る鋸山の裾を、僅に白い線で縁取つてゐる。
 凡そ此街道を通る者、男と云はず、女と云はず、乗合馬車と云はず、此處に

休んで遊茶を啜らぬ者の殆ど無いのであるが、此茶屋が斯く繁昌する理由は單
 に景色が佳くて涼しい計りでない、此處は恰も村境に當るので、云はゞ三崎の
 關門である所から、何となく感じて引付けられる客が多いからで、私は故郷を
 後に東都遊學の途に上るべく、多數の人に見送られて、今、藤棚の下に佇んで
 ゐる。

「ぢや愈々お別れです」御機嫌宜う「身体をお大事に」來年の夏は屹度お歸省
 なさい「左様なら」と口々に云はれた時は私の胸は一杯になつて了つて、「ぢや
 皆さん」と言葉少なに應へた計り、一步々と別れの道を刻むと暫時にして顧
 みれば、一團の人々も見返り勝に歸り行く、中に一際肥大なのは父上である。
 ア、父上！此春私が前途の目的に就て切言した時、何と仰つたのであらう。

「家には固より餘財があるではないが、お前に十年間の仕事を遂げさせる位の事が出来なくては俺も親甲斐が無いと云ふもんぢや、よし確に承知した、俺の身は粉に刷いても假令んば先祖代々の田畑を賣つてもぢや、お前を屹度立派な者に仕立てゝ見せる。」と云つて、煙管の雁首で火鉢の縁を叩き凹まれたが……と懐しい後姿を目送すること多時。

と、気が付くと、私は横須賀行の三等客車の一隅に歸省の鞆を擁して、十年前の淡い夢から覺めたのであつた。

私は心の底に妙な淋しさを覺えたが、斯る折には好い物がある、それは五週間程前に父上から届いた手紙で、早速それを鞆から取出して讀む。

落第した由、失望此上なし、今年は待ち焦れた卒業証書を見せて呉れる事と、指折りて夏を遅しと待居候ものから、つい気が機動んで（此下に續けて、「罪もない馬車馬の尻を鞭ち」と書いたのを太い棒で消してある、何の事やら譯が分らぬ、馴れぬ勤務も辛からず、況して未來になれば昔話の一節に加はる事と思へば、好きな酒はなくとも新しき疊は欠くとも現今の境遇は中々に面白く、彼奴は田畑も山林も賣放してあんな態をしてついぞ極りの悪い顔をした事もない、氣樂者よ呑氣者よと他人から云はれて、云はるれば云はるゝ程尙更意地になりて、お可笑くもない事を笑つて暮居候處、まだ笑ひ様が足らぬ尙一年の間最つと辛痛い事を最つと面白く笑へと命ぜられたには聊か困却致候、さりながら俺は決して後方へは退かぬ、茲一年位の學資は住家

と道具は賣拂つても埒の明く事、其邊は安心してお前も短氣は損氣一遍位落第したとて恥にもなるまじければ自暴を起さず益々勉強して明年は必ずお前が十年苦學の証明書を佛殿に供へて、俺に心からの嬉し笑をさせて呉れる様吳々も頼入り候。

慄然として身に沁み渡る一句々々温然として胸に溢るゝ一節々々嚙み緊むれば嚙み緊むる程、面目がない、氣が濟まぬ、面目がないから會ひたくはないが氣が濟まぬから會つてお詫がして見たい。

父上は私の心配を學業に害ありと慮つてか、家事に就いては何も語らぬ、只今年の春から或會社に雇はれた事丈を洩したのであつたが此手紙で推察すると固より不満ぬ位地なのであらう、田畑も山林も既に賣盡したと見える、それ

やこれやの様子も知りたい、旁々會つて慰めても上げたいと云ふ心から、一旦は斷じて歸省らぬと決定めた心を翻して、他人はそろく歸京しやうといふ九月初旬の今日此頃歸省の途に就くのであつた。

一体歸省の途は靈岸島から三崎通ひの汽船に乗るのが一番便利で且經濟ではあるが、暴風を避けて陸路を取つた爲に尙此處横須賀から七里の道を徒歩せねばならぬ、私は麥稈帽子の上から大きい西洋手拭を頼冠に冠つて、一つは烈しい風に供へ、一つは強い秋の日を防ぐべく用意した。

五里餘歩いて上宮田の村盡れ迄來た時、後方から乗合馬車が恰も私を掬つていも行きたいかの様に、からころと軽く音立て、馳せ來つた、餘す處は一里餘の道程に過ぎぬが、足も疲れて來た、風に消されぬ日の暑さもある、それに「三

「崎迄乗つて行きませんか」と馭者に優しく勧められては最早それを謝絶する勇氣もない、私は聲に應じて乗車した。

馬車は二頭曳の十二人乗で、道路の宜い割合には動揺が烈しい、乗客は殆ど満員で私は窓掛の端から強い西日が灼然に當る馭者臺寄りの空席に、腰を下すべく餘儀なくされた。

馭者は後姿から推しても、聲から察しても、五十二三の年配、襯衣の上にチヨツキのみを着た、肩の肉附等は父上そっくりな大男で、嚴然として手綱を控へつゝ、私と向ひ合つた商人風の男と心安体に談話してゐた。

商人風の男は稍聲を低めて「ちや住家を賣却つて其金を倅の學資に仕送らうと云ふんだね。」

「左様だ、最早田畑も山林も賣飛ばして了つたから他に仕様がなない」と馭者は力の入つた一鞭を瘦馬の尻に加へた。

「出来ない事だ」と商人は心から感じ入りて、「左様と聞けば俺もお前の爲に一肌脱ぐが、大体幾程位なら手放す積りかね」

「二百圓位なら家屋が古いから減價けて了うだ」と答へて更に「二百圓あつたら一年間は何うかなるべい」と獨言。

「ちや息子さんは最う一年で物になるのかね。」

「實は今年の卒業だつたんだが運悪く遣りそくなつて、」と甚た語尾が低い。

「そりや、残念！」と商人の聲は頗る大きい。

私は例の風体の頬冠の間から出した眼と鼻とに不思議の色を作つて、馭者の

顔を盗み見た、時は遅し、私は雷の如く全身を疾走する一種の寒さを覺えた、云ふ迄もない、それは正しく父上なので。

「強情な俺も今度は少し氣拔けがしたよ」と又手痛い一鞭。

「だけき失望する事はねえや、山が見えてるんだもの。」

「だから、俺は笑つて鞭を握つてるだ。」

彼お手紙に塗抹されてあつた、「罪もない馬車馬の尻を鞭ち」の句の秘密は今漸く解き得た、と同時に、私は父上が斯る職務に身を勞さるゝを意ともせぬ、それを恩にもかけ玉はぬ、海の様なお心に對して、難有いといふよりは寧ろ耻しいといふ念に、烈しく胸裡を搔撈られて、私は一刻も其席に居たゝまれず、馬車から飛下りやうとして尙躊躇してゐるを、新に一人の乗客があつた、意外

にも之れは同窓生の岡田と云ふ男で、私の隣へ割込んで着座すると、妙な羽目になつて、もぢくする私の頭から足の爪先迄、ぢろりと見下して、「や、君か、歸省しないなんて云つてたが、矢張生國が戀しいと見えるな」と無遠慮な大聲。

單に「君」と呼ばれたから、まあ宜かつたものゝ、もし「伊藤君」と叫ばれたら、それこそ最後、私は父上の鋭い注視から免れなかつたであらう、と胸撫で下しつゝ、「や意外な處で、君は何處へ行きますか」と言葉少に妙な調子を作つて態と皺噎れ聲で應へた。

「君大變顔色が悪いぞ、何うかしたのか、それに聲音も調子も餘程變つてゐる」と頗る怪訝な顔。

「實は此間から風邪を引いてゐるんだが、今又急に腹痛がして談話をするのも大儀でならない」と口から出委せな事を云つて、強て其の態を装ふと、岡田は袂に手を入れて「腹痛か、そりや不可ん、僕寶丹を所持つて居たんだが」と頻りに探してゐる。

「何、お客様が腹が痛い？」と取者臺の優しい聲が一寸振向いて「俺、好い薬を所持つてゐる、是を飲めば何んな腹でも立所に癒る、まあ、欺されたと思つて試つて御覽なされ」と従向の儘、掌へ薬包を載せて私の方へ差向けた。

私は手が顫へて、もぢくしてゐると商人が取次いで呉れた、受取つて見ると神丸といふ丸薬で、これは私が幼少い時分、屢父上に飲ませられたものである事をよく記憶する、やれ時候の變り目だ虫が起つては困る、晝には悪い物を

食べた其毒消しだぞ、雪腹にやられてはならぬ、水中りがしては不可ぬ、と現今でも耳の底に其お聲が……と思ふと、遂涙を催すのである、斷つて置くが、私は二歳の時、母親を失ひ、以後は子煩悩な父親の手に養育されたのであつた。

私は包の中から其二三粒を振出して、金色に光つた情の玉を噛みしめながら、残りの物を返却すべく又商人の手を煩して「難有う御座います、お蔭で助かりました」と例の歎嗟れ聲で挨拶すると、

「なあに、俺の薬で一人の苦しみが取れれば俺も何んなに心地が好いだらう、薬を自慢する奴もないが、此品は東京の何とか云ふ薬屋で賣る丸薬でな、俺は三十年も以前から絶えず身に着けて自分も飲み他人にも勧めてゐるんだ、

現に我家の一人息子なんざ幼少い時分に此薬のお蔭で危い命を拾つた事がある、だから俺に取つては神丸大明神だよ、あはゝ」と無邪氣な笑。
私は胸が張裂ける計になつて頓には言葉も出ない、少し間を置いてから「お蔭様で大變好くなりました、と拍子抜けのした答をして密に頬を傳はる涙を拭つた。

岡田は先刻から私の顔をじろく視てるたが、「君、其手紙を取り玉へ、そんな真似をしてゐると宜しくない」と無遠慮にも私の頬冠りを解くべく手拭に手を掛けて、「君は泣いてゐるんだね、涙が出る程腹が痛むのか」

私は慌てゝ手で制して、急に便を催して來たといふ口實の下に、徐行の馬車をひらりと飛下りた、ほつと太息をしながら見れば、藤棚茶屋はつい一丁先で、

馬車は聽て其處に止つた。私は、徒者の手から逃れた雀の子の様に暫時は考感もなくあちこちと逍遙つたが馬車が再び進行を始めた時、私は茶屋の方へ急足に歩いた、雲は何時か天に擴がつて風は愈烈しく、どんとりと地に投けた松の影を、長く早く動かして、時々は其影さへ奪ふ迄に日の色が曇るのであつた。

私は藤棚の下に立ち、松のざわつきの中に轉輾の音を運びゆく馬車の後影を見えなくなる迄恍惚と見送つた、聽て喇叭の聲が聞える、或は高く、或は低く、恨むが如く、嘲るが如く、半島を青く色彩つた松山の松の葉毎をそよがし去りて、對岸の鋸山の巖に迄浸み入るやう。

私は草鞋の紐を締め直して今又此郷關を出るのであつた。(木犀)

【評】如何にもものびくとした書き振り、眞に模範的の傑作である。

流し雜

其一

……さし——た柳が、ついた——ぢやないか、思ふて添はれぬ事はない、
ホイ……

岸は一帶の葦が青々と茂つて、風に戦いで物淋しい川原には、蟹が美しい甲の
紅を、彼方此方の葦の根元に表してゐる。

夕ぐれの遠山がうす紫に彩られる頃は、川の上も下も濃い霧に包まれて、青
葉の茂る中から、白鷺が二三羽飛び出した後は、また寂寞となつて、絶え絶え
の霧の中からは、人も船も見えないが、川面にひびいて聞こえてくる唄に、二

人は等しく呼びさまされたやうに、首を擧げてまた涙ぐんだ。

『お國さん、もう諦めてお呉れ、待てば長いけれど、直にまた逢つて話も出来
るやうになるのだよ、後四五年の其の間、忘れずに待つてゐてお呉れね、私
も忘れない、屹度忘れないでゐる。』

といったのは、村では若者の數多い中に、たゞ一人勝れ者と云はるゝ源次であ
る。

彼れは村の小學校を卒へると、東京に出て中學校に學んだ、末は天晴この某
村に花を咲かせやうと、燃え立つ彼れが希望の光は、何者の誘惑にも如何なる
迫害にも打勝つて勇ましい凱歌を鎮守の社の、大銀杏の下に立つて擧げやうと
たえず、胸には春の色が野山の草の芽と燃えて、菜の花つゞく霞の中に、あこ

がれ迷ふ蝶々のやうな、そんな浮いた心は微塵もなかつた。で、さいく、明日を夢みて暮すうち、月過年行き、いよく源次は抜群の成績を得て、中學校の門を出たのであつた。

國へ歸れば兩親の笑顔、兄弟のよろこびは云ふまでもない。村一般に源次のやうな秀才を出したのを誇つたくらる。

けれども源次は其れを満足に思はない。その歡迎を決して喜びはしなかつた。

勿論彼れは中學校を卒へるのが望みではないのだつた。

望む處はこれからの事で、工業の専門學校へ入つて、これを天晴仕遂けたら、自分もいかばかり嬉しい事であらう、其の時こそは村の人々も共に喜んで呉れ

たら、自分は實に満足するのであるものを、若しこの後一步でも踏み進らすやうな事があつたなら、村の人々に何んと云つて、己の臍中斐なさを詫びやう、この身を裂き刻んで、あの銀杏の枝につるしても、尙自分としては其の罪を滅ぼしたとは思ふまい。これからだ、自分はどうしても銀杏の下に立つて、人生初步の凱歌を擧げなければならぬのである。よしたとへわれと我が身を裂き刻んで、死耻を曝すのもあの銀杏だ、銀杏の枝だ、あゝかの銀杏は果して自分の爲に祝であらうか、將吊ひとなるのであらうかと思つた。

其二

源次は勇んで東京へ出た。

日夜の勉強が遂に源次の身体を害ねたのか、それとも自然に發病すべきまは

り合せだつたのか、東京へ出て半月とも経たないうち、源次は忌むべく、厭ふべく、恐るべき、眼病の擒となつたのである。
詮方ない、己はいよく自ら誓つた银杏の枝に面伏な顔を見られなければならぬ運命となつたのか、しかし病ではないか、眼の病の爲に迫害されたのだ、未だ絶望する時ではない、残念だが靜に全癒を俟つて、再び試験を受けねばならぬ、口惜いが身体は太切だ、歸らう、故郷へ歸らう。
前には都へ上る勇ましい源次の姿を見送つた村人は、今は同じ人の悄然とした病すがたを、故郷に見ねばならぬ事になつた。
土橋を渡つて松並木に添ふて、流るゝ水の音きゝ乍ら、深いもの思ひに首を垂れて行く、明晰見えぬ悲さに、源次は松の根に躓いてよろめいた、支へる間

も無く、忽五六歩前へ倒れた時、後から甲走つた聲が、叫ぶやうに聞こえらると共に、草履の蹠音は早や源次のそばに來てゐた。
「まあ危い、どうかなさいましたか、お怪我は……」
といつたのは、村の評判娘、絶えず若者共が口の端にかかる、お國であつた。
「有難う、さうもしやしません、」
と云つて源次は立上ると、右足の親指はからくれない。
「あ、血ちやありませんか、痛いでせう、え、痛たかありませんか、」
と眉を擡めて、源次の面を仰ぐやうに見た時、源次は病む眼をお國の顔に注いだ、お國は思はず面を紅めて、耻しさうに頸を垂れて了つた。

「いゝえ痛かあないのです、爪でも剥れたのでせう。」

源次は袂から半帕を出して、小口を齒で裂かうとした、と見てお國は、

「こちらにあります、穢いのちやありませんから、結へてあけませう。」

と手早く半帕を出して、惜しけもなく裂いて、甲斐くしく云ふのである。

「私の方にあるのに、切まで貫つてその上に、結へて貰ふのちや心苦しいから、自分で結へます、それ程の傷ではありません、その切を下さい。」

と源次は辭した、お國も強てとは云ひ得なかつた。

「痛みやしませんか、」

雲雀の聲が空高く聞こえる、遙かに梢を現してゐるのが其の銀杏の樹。(丹崖
流れ雉より)

看護婦

【評】 如何にも面白く讀ませる筆、然も微細な觀察、他の模倣を許さない。

病室の掛時計は、今、靜かに八時を打つた。白金巾の掛幕を引き絞つた窓からは、硝子板を通して、青白い月の光が朧然と、寢臺の上に患者が引被いだ白い厚毛布の幾枚かど、人の胸の上に盛り重つた。さゝやかな小山の如きを、室内の電氣の光を競うかの如に、染め出して居る。

窓の外は一面に籠め渡せる乳色の夜の靄、今を眞盛りに咲き亂れたる櫻花の指し交ふ枝を鎖す朧夜、温風の音なく通る時折、ひらくくと舞ひては落ちる花片も、春は有情の、恍惚の。

何所よりか、憧憬れたやうなピアノの響、看護婦の千代子は、青白い顔を舉げて耳を澄す様子、空想の花野を分けて、美しい幻影でも追ふかのやう、神々しき其の少時、やがて、千代子の頬には、紅潮のゆらぎ薫り、美しき瞳は、雨に洗はれた夕星の一人冴ゆる輝き、紅色鮮かな兩唇が小さく割れて、白王聯ねた前歯が見えると、細く澄んだ鶯のやうな、聲音、「おゝ、ローレライ！」と又酔ふたやうに、うつとりと響き来る曲に耳を傾けたが、「矢張、ローレライだわー」……………ミレソレレシ……………ミレドドシラシドドと、遙にも来る曲の昂低に合せて、朗かな聲で低く譜を唱ふ現なの様、高く清き美は、今、此の精神の遊離した、無邪氣な、美しい、もぬけ殻に凝り成したやう、つややかに裕かな前髪、白くハツキリした頬、ちと羅馬式な、如何にも優しい、風情ある鼻

筋ウエナスが嫉み相な蛾眉の得云はぬに、氣高いつぶらかな眼、ふツくりした頬は、瓜實形に、締つた唇、所謂彫塑式の嚴かな艶やかさ、十九か二十の色も香も、今を眞盛りの匂ひとこそは見ゆれ、千代子、齡は二十八。
吊り下げられた電燈を前に、小形の洋机に凭つて、身細な、日立たぬ程の金指環を薬指に嵌めた左の手に頬をもたせて、青色鉛筆を持った右の手をば、机の上に置いたまゝ、千代子は恍然と、唯無意識に病床、日誌の紙面を見詰めて居る。

今し、千代子の心は、茫たる過去の回想てふ、うら悲しい夢の霧野を彷徨ふて、一步々々、遠く深く、冥濛の果しなき奥へ。

おゝ、ローレライ！ 懐しい彼の曲、悲しい夫の曲、(熱い涙が二三滴、はら

く、と日誌の上(うへ)にこぼれた)あゝ、七年の昔(むかし)夜は行く春(はる)の落花(らくわ)の雨(あめ)、月影(つきかげ)薄(うす)し、吊帳(てうちやう)の光(ひかり)、人(ひと)をして怨愁(えんしう)の腹(はら)を絞(しぼ)らしめし夫(か)の夜(よ)！ 高枝(たかえだ)様(さま)、義兄(ぎけい)様(さま)が、芝(しば)のお邸(やしき)の、忘れ(わす)れもやらぬ、嘗(かつ)ては、卯(う)の花月夜(はなづきよ)、朧(おぼろ)なる東(ひがし)の椽(えん)の端居(はしる)、私(わたし)の手(て)をしつかり握(にぎ)つて、我等(われら)の愛(あい)も、此(こ)の、しめやかな、静(しづ)けき夜(よ)の、漂(へう)茫(ぼう)の薫(かほ)り、悠久(ゆうきう)の色(いろ)の床(ゆか)しきが如(ごと)くに、淨(きよ)く嚴(おご)かに、狂(くる)れず、爛(らん)せず、靄(もく)々(く)と永劫(えいせつ)變(かは)らぬやうにと、誓(ちか)うて下(くだ)すつた、その同(おな)じ夫(か)の室(ま)變(かは)れば變(かは)る、あゝ定め無(な)の、最期(さいご)の病床(びやうど)を敷(し)かれた夫(か)の室(ま)、千代子(ちよこ)は顔(かほ)を蔽(おほ)ふた、髪(かみ)が二條(ふたぢう)亂(みだ)れ落ちて、眞(まこと)白(しろ)な指(ゆび)にまつはつた)義兄(ぎけい)様(さま)が、落(お)ち凹(くぼ)んだ眼(め)を、かすかに開(ひら)いて、死出(しで)の別(わか)れに、好(この)みの一曲(いっく)をとの御望(ごのぞ)みに、力(ちから)も心(こころ)も何處(いづこ)へか、抜(ぬ)け去(き)つた身(み)をよろくと、ピアノの前(まへ)に倒(たふ)れるやうに座(す)つて、涙(なみだ)に曇(くも)る眼(め)に見(み)えわかぬキイを、わな

よく指(ゆび)に、奏(かな)でたのは、今宵(こんや)聞(き)くそれと同(おな)じローレライの曲(うた)、あゝ思(おも)へば、まことありし昔(むかし)、悲痛(ひつう)、胸迫(むねせま)つて石(いし)の如(ごと)かりし夫(か)の夜(よ)！ 奏(そう)し了(お)ると、義兄(ぎけい)様(さま)は、右(みぎ)の手(て)に、櫻子(さくらこ)様(さま)の手(て)、左(ひだり)に私(わたし)の手(て)を握(にぎ)り緊(し)めて、戀人(こひびと)よ、さらば、義妹(ぎまい)よ、さらばと、あゝ、もう永劫(えいせつ)に……あゝ義兄(ぎけい)様(さま)！ 泣(な)きくづをれる櫻子(さくらこ)様(さま)を、涙(なみだ)さへ出(で)ず(に)呆(ほう)け立(た)つた私(わたし)を、跡(あと)に残(のこ)して！ 千代子(ちよこ)は兩(りゆう)の手(て)を机(つく)の上(うへ)に重(かさ)ねて、其(そ)の上(うへ)へ顔(かほ)を伏(ふ)せた)あゝ、思(おも)へば、夢(ゆめ)の如(ごと)き過去(かこ)！ 義兄(ぎけい)様(さま)がまだ大(だい)學(がく)にいらして、私(わたし)は女學(ぢよがく)校(がう)を卒(そつ)業(ぎふ)した春(はる)、鏡(かみ)ヶ浦(うら)の夕風(ゆふかぜ)に、雲(くも)に入(い)る日(ひ)が彩(いろ)る波(なみ)の黄金(こがね)白銀(しろがね)、か(か)の島(しま)が根(ね)の上(うへ)に、薄紫(うすむらさき)に霞(かす)み出(いで)たる遠富(とほふ)士(し)の影(かげ)から沖行(おきゆ)く船(ふね)の片帆(かたほ)眞帆(まほ)、眺(なが)めも飽(あ)か(か)で立(た)ち盡(つく)して居(ゐ)た時(とき)、ふと、アーベンドロートとやらの歐詩(おうし)を誦(ず)する朗(は)かな聲(こゑ)、見(み)まはせば、直(す)ぐ右(みぎ)手(て)の海(うみ)に突(つ)き出(で)た巖(い)

の端に腰かけて、現なげに憧憬れ玉ふらしきお姿、氣高い其横顔、………
 を過ぎ行く漁夫等の高談に驚かされた迄は、我にもあらで、唯見詰めまらせ
 た私、その時の私の心は、何となく、多年憧憬れ求めて居たものを、探し宛て
 たやうな氣がして、嬉しいやうな、と云ふても、唯、酔ひでもしたかのやうに、
 力ない、恍惚

其夜は、一夜、眠られなかつた。

二人は、何時しか、親く語り合ふ仲となつた。月明き一々、若葉の緑新し
 く、海の上来るそよ風に、ゆらぐ梢の數々は、見上ぐる空に、星を隠し、星を
 表はす木の下路を、そよろ歩きの折柄、口に得云はぬ、古りし情思を、情に任
 せて書き亂した、丈なす文を、思ひ切つて、そつと、後から、高枝様の御手に

握らせて上げた。その次の夕暮、忘れもやらぬ、かの遽かに降り出して来た雨
 を、金刀比羅の社の椽に避けて、高枝様が、あの情の籠つた、しんみりするお
 聲で、千代子さん、貴嬢のお心は熱く分りました。僕は誠心、感謝します。そ
 れより以上、何と云ふて可いか……… (高枝様は、私の手を握り緊めて、涙
 乎と、丹摺らふ私の横顔を見詰めたまひ、少時、何事か云はうとして、得う云
 へないかのやうに、もじくして居られたが)……… 千代子さん、僕はね、
 喜んで、貴嬢の愛に酬ゆ可き筈なのですけれども、僕には………、僕には、既に
 相思ひ、相愛する人が有ります、(私は、胸をす々に掻きむしられる氣持がした、
 高枝様は、無言の儘、月の隠れた空を仰いで、微かに長息を吐いて居らした、
 私は、もう、總身に力が絶え果て、止途なく、涙かはふれ落ちる計り。かく

て、幾度経つたものか、とんと、記憶して居らぬ、が、高枝様が、私の耳元へ口を押付けるやうにして、千代子さん、貴嬢若し、お厭でなきや、僕の妹になつて下さいな、ね、千代子さん、而て、一生、兄妹として、清浄な、精神的な、神聖な、愛情——友情を續けやうぢやありませんか、ね、千代子さん、ね………。高枝様は、力の限り双の腕に、私を抱き緊めて下さつた。其瞬間から、高枝様は、私も義兄様、私は、高枝様の義妹になつた。夏の初め、義兄様が、學校の試験を受けにやならむからつて、私も同行で東京へ歸つて來ると、芝の公園で、義兄様の戀人櫻子様に、私を紹介して下さつて、其からは、私と櫻子様は、矢張、義姉妹。

櫻子様は、其時十九私よりは一歳上、學校を卒業なすつてからは、哲學博士

とやらの一米人に就いて、神學を研究して居らした、ほんとに、お名前の通り、艶やかで、上品な方、義兄様とは、趣味も理想も一にして居らした。千代子は夢みるやうな眼を舉げて、あゝ、義姉様は、今時分は、何をしてお居でだらう？（と、思念の轉るのと一致するかのやうに、瞳を動かして居つたが、ふと、恐ろしい物にでも出會した時のやうに、身を標はせて）おゝ、夫の時！義兄様の靈魂が、冷え果て死骸を残して、天國へ昇つた時！義姉様が、脚の方から消え失せるのぢや無いか知らと思はれる位力なく、萎々と、寢臺の側へ跪いて、亡き人の冥福の爲に、歎歎り上げながら、捧けた祈禱が終るか終らないに、房なす光澤かな黒髪を、結元から、ふつつりと切り落し、オリイブ色の縮緬の袖口を、前齒で、びりりと裂いて、わつと計り泣き倒れた時と云

つたら、側で見て居る私の心は、千々に張り裂ける思ひ、其時、私は泌々感じた、人間の死と云ふものは、如何に悲惨なものであるか、うら若い人の死は、如何に痛惜しいものであるか、戀しい人を残して、死んで行くのは、如何に苦痛しい事であるか、慕へる人に死別れて、眞の愛の永久に滅びた、淋しい頼りない世に残されるのは、如何に遺瀨ない事であるか………

義姉様は、清淨な獨棲を神様に認めて、幾多の憐むべき、孤兒病老の爲めに、末長い身を献けて、養育院の保姆となられた。而て、私は、人の死、若い人の死、戀はるゝ人の死を、出来得る限り、我身に代へても、堰き止め度いと云ふ願で、義姉様の切な諫止に背き、親近の嚴しい拒止をも無視して、此看護婦と成つた。………あゝ、其からは最早七年、あゝ、萬事は皆な夢の如であ

る。千代子は、病狀日誌の上に、胸を伏せて、恍惚と眼を瞑つた儘。

時計は十時を打つた。患者は遽かに咳き込むだ。千代子は驚いて、飛び立つ様に、椅子から離れて、患者の額に湧いた盗汗を、そつと拭き取つて、脈を取らうと手首を握つたが、思はず肩をひそめて、おゝ、非常な熱！と小聲の下から、そつと、手を元の通り、毛布の中へ包み込んで検温器を二三回振つて、患者の腋の下へ入れた。患者は矢張唯夢中。側の椅子へ靜に腰を下した千代子は宛然、嬰兒の如に、すやくと昏睡する患者の顔を、凝乎と暗下して、胸の中で、能くもまあ、斯も似て居らつしやること！額の形から、眉、鼻筋、口元まで、義兄様にそつくり、其に義兄様と同じく、制服の襟章は、懐かしいエール、此様な氣高い相貌をして居らつしやるんだもの、お心までが、何となく薫

しい心地がする、そうく、過時ぞや、袂から、こぼれて落ちた、洋野紙に書き連ねた女文字の幾條を、讀むともなく讀めば、確かに玉木様とやらに、戀ひ慕はれて居らつしやる方なだもの、誰が、斯様な方を見殺しにして堪るものか、斯な若い方を……人に戀はるゝ方を……(千代子は、一入熱心に患者の顔を見入つて)……

須藤さん、私は誓つて、貴方の生命を取り止めて上げます、幾ら、貴方の肺炎が重症で有らうとも、私の眼の開いてる限り、私の指の動く限りは、決して決して、貴方を、死の冷い手へ渡す事を許しませぬ、私の脈が搏ち、私の血液の循環する以上、私は健全に復した貴方の手を、玉木様の手に繋ぐすには置きませぬ、須藤さん、私誓つて……

千代子は、床の上に跪いて、椅子の上に組み合はせた両手の上に、額を伏せて、熱心に祈念を捧げた、その聲は涙に潤んで、

……、神様、若し、此の若人の美しい生命を、夫の清らかな少女の爲めに假し、恵み、祝し玉ふならば、私は、誠心、此價値なき生命を、好んで、神様の御許へ捧げます……願はくば、神様、哀なる子の哀願を願ひ玉へ……遠く聞えたピアノの音も、何時しか絶えて、花霞む夜の春も初夜過ぎ、雪厚く、いづこの空にか、月影を閉して、冥々の天地、唯森々、この病室からか、折々漏るゝ咳聲の嚮微かに。(夏村)

【評】 作者の如何にも神経質なところが遺憾なく現はれて居る。佳い作である。

一ツの石

此處は△△の町端れ、舊組屋敷の有つた處で、屋敷の竹籤や雜木が道を挟んで居て、何時も濕り勝ちな晝尙ほ暗い、殊に夏なんざは蛇がぶら下つて居たり、葦が飛んで出たり、落葉の雪の消えたことのない、歩む足にざわぐと絡んで、それが夜で有ると妙に陰に響く、○○様の大椽に狸が釣瓶を下けた、○○様の竹籤に狐が火を點したとの此邊の怪談も、満更虚ならぬ、淋しい、恐ろしい、氣味の悪い道で有つたが、明治も此處に三十幾年、物換り星移りも古めかしいが、別けて維新の大地震が有つたので、其變り方も亦甚だしい、持主も大變はね飛ばされて終つた、屋敷も大方壊されて終つた、竹藪や雜木も大概何處

へやら飛んで行つて終つた。而して近年新しい小さい長屋が續々建てられた、先づ大工が引越して來た、次に車力が來た、其又次に車夫が來た、日傭稼が來た、ランプやホヤよろしが來た、煙管仕替が來た、寡婦の洗濯婆さんが來た。總て下層を通じて見らるゝ世渡りの種々の主人が大概此處に見らるゝ様になつた。されど何づれも正直で達者で能く働くから、如何な不景氣の時も此處のみは何時も太平で、喧嘩ひの聲一つ漏れず、家内波穩かにして鶯の番ひの睦じく子供も大變に殖えた。此等の小國民が朝早くから夕べ遅う迄、おめき叫び狂ひ廻るから大變にぎやかな陽氣な町となつた。

今日もランプやの金ちやん、大工の子の松ちやん、日傭稼の由ちやんなど、何づれも五六才の此邊の小國民が、早や秋の日の暮れがてになるも知らず、何